

17 世紀における泰山巡禮と香社・香會

—— 靈巖寺大雄寶殿に残る題記をめぐる ——

石 野 一 晴

は じ め に

泰山は中國における象徴的な聖地として戦前から研究がすすめられてきた。その多くが封禪についての研究や道教との関わりについての研究であったが、シャヴァンヌ (Chavannes 1910) や澤田瑞穂ら (澤田・窪 1982) は民衆の信仰にも注目し、彼らが泰山府君ではなく碧霞元君という女神を信仰して泰山に押し寄せることを明らかにした¹⁾。

また泰山への巡禮はシャヴァンヌ達とは違った興味関心からも取り上げられた。それは戦前の日本をはじめとする社會學者達によって行われた農村調査である (中國農村慣行調査刊行會 1952)。日本の農村と同じような共同體が存在するのかどうかという觀點から行われたこの調査では、祭祀共同體や華北の農村にあまねく存在した會や社といった農民の集團生活の必要より生まれた團體が注目された (福武 1951)。そのような研究が進められていく際に、泰山への巡禮にも言及することがあった²⁾。しかし、いずれの研究も泰山巡禮を中心に据えたものではなく、調査對象となった農村に泰山へ巡禮する會が必ずしもあったわけではない。また、華北には祭祀組織に関する文書なども残っていないため³⁾、泰山巡禮についての知見が深められることはなかった。

しかし、ここ 20 年の間に歐米を中心に巡禮研究が急速に盛んになり (Naquin 1992) (Dott 2004)、その影響で中國でも泰山研究が活發化し、特に山東省の研究者を中心に多く

1) 他にも滿洲の女神信仰の研究も泰山巡禮について言及している (橘 1936) (奥村 1982)。拙稿でも最近この問題について論じた (石野 2010)。

2) 近年では (Duara 1988) が近代の華北農村を研究する際に農村調査報告を活用したが、その中で山東省恩縣の泰山巡禮の記録を取り上げている。小田則子氏は青苗會について考察した論文の注で當地の泰山會の記録を紹介する (小田 1995)。

3) 例えば江南に關して言えば、澁谷裕子氏が徽州文書等の會簿を用い、地域社會における祭祀組織に關する貴重な調査を行っており (澁谷 1990)、近年では (太田・佐藤 2007) が太湖流域の祭祀組織について聞き取り調査も交えた意欲的な研究を行なった。

の論文が発表され、泰山巡禮について大まかなイメージを抱くことができるようになった（山曼 2001）（葉濤 2009）。以下、現時点で明らかになっている泰山巡禮の概要を記そう。

泰山巡禮は古くから行われていたが、明末にはとりわけその数が増え、年間 80 万人を超える人々が巡禮を行い⁴⁾、その後も年によって前後はしたであろうが、前近代においてこの数字は大きくは変わらなかったとされる⁵⁾。巡禮者が特に多かった時期は 1～4 月であった。正月には近隣の農村から泰山に登る人々も多く（葉濤 2009）、4 月 18 日は碧霞元君の誕生日とされ多くの人々が泰山の頂上に登った。春には 1 日に 3000 人から 1 万人、新年や元宵節の頃には 1 万人から 2 万人という記録も残されているほどである⁶⁾。また農作物の収穫を終えた 9 月にも近隣の農民を中心に「秋香」と呼ばれる巡禮が行われており、このような傾向は現代の泰山巡禮にも見られるようだ（葉濤 2009）。

巡禮者達は山東だけではなく幅廣い地域から集まっていた。明末の謝肇淛は「齊・晉・燕・秦・楚・洛の諸民で泰山にお参りしないものはいない」と語っている⁷⁾。つまり長江以北の幅廣い地域から巡禮者が集まっていたのである。同時期に中國全土を旅したことで知られる陳第は「泰山夫人廟」という詩の一節で「お参りの人が全國からやってくる」と歌う⁸⁾。泰山は華北一帯、さらには中國各地から多くの巡禮者を集めた聖地である、と當時の人々にも認識されていたのである。

これだけ多くの巡禮者が多額の寄進を行ったため、これに目を付けた宦官が参詣者から金銭を徴収しようと考え、香税という入場料を徴収することが制度化した。年間數萬兩の収入が見込めたようで、それは官僚の俸給や王府の財政にあてられ、一部は中央政府にも送られた⁹⁾。また、泰山頂上にある碧霞元君という女神の廟では多くの民衆によって、きらびやかなマントなどの織物や寶飾品、あるいは子供の人形¹⁰⁾などが廟の中に投げ込

4) 陳宏緒『寒夜錄』卷中

毎歲三四月，五方士女登祠元君者數十萬。夜望山上，篝燈如聚螢萬斛，上下蟻旋，鼎沸雷鳴，僅得容足。

5) 香税徴収額は巡禮者数を推定する際に参考になる。『明史』卷 82 には「泰山香税二萬餘兩」とあり、萬曆 8 年（1580）の一人あたりの香税額である 8 分をもとに計算すれば 25 万人程度が訪れていたことになる。それ以外にも存留分もあったはずなので、實際の巡禮者はこれよりも多かったであろう（Dott 2004 pp. 293-294）。萬曆 21 年（1593）の碑刻に毎年數十萬人が來たことが記される（宋汝和『泰山述記』）。現在では年間 300 万人もの巡禮者が泰山へ巡禮するようだ（Zhang 1991）。

6) 張岱『琅嬛文集』卷 2。

7) 『五雜俎』卷 4「地部二」。

8) 陳第『五嶽遊草』卷 5「鐵瓦銅楹佳麗地，進香人自九州來」。

9) 香税は山東省以外の人々からは割り増しで徴収していたが、本籍を偽る人が多く、萬曆年間から一律で徴収されるようになる（澤田 1982）。

10) これは子供を授かるようにとの願掛けのために奉納される（顧 1988）（澤田 1982）。

まれたが、こういった奉納品も4月末と9月末の2回、官の手によって回収された¹¹⁾。このような膨大な富が泰山に集まることは倭寇にも知れ渡っており、濟寧や臨清とともに眞っ先に狙われる場所ともなっていた¹²⁾。金銭的に潤ったのは官だけではない。巡禮者目当てに多数の商人が交易に集まり、彼らを泊める宿屋は大いに繁盛した¹³⁾。こういった賑わいをイメージするために崇禎初年に泰山を旅した張岱の遊記の一節を見てみよう。

〔泰安〕州城から數里離れたところで牙家が送迎し、馬を控えて〔宿屋の〕門までいたる。門前には既に十數間、遊郭が十數間、俳優が居住する部屋が十數間あった。かつてこれは泰安州の〔すべての施設が集中している〕ことだと思っていたが、なんとこれは一件の宿屋が所有しているものだという。宿屋につくと、税房にも、駕籠を募るのも、香税を納めるにもすべて決まりができていた。客は上中下三等に分かれており、泰山を離れる者は送り、泰山にこれから登る者は祝い、泰山にやってきた者は迎える。客單は數千、房は十カ所、葦素の酒宴・樂團・使い走りの者はそれぞれ百を越え、牙家も十姓を越えた。入山する者は一日に合計で8000人から9000人になり、春の初めには1日2萬人にもなる。山税は1人あたり1錢2分であり、1000人であれば120〔兩〕、1萬人で1200〔兩〕、1年で20萬から30萬〔兩〕が入ってくる。牙家の大きいこと、山税の大きいこと、すべてわれらの泰山が大きいからである。ああ泰山!¹⁴⁾

このように、明末の泰安には牙家という宿屋兼エージェントとでも言うべき人々が集まり、参詣者から利益を得る仕組みを巧みに作り上げていたのであった¹⁵⁾。

さて、この賑わいを作り出したのは「農民達」であり彼らは「社や會と呼ばれる任意の團體を作って」巡禮したとされる(陳寶良1997)(葉濤2009)。個人で旅することはきわめて

11) 『五雜俎』卷4「地部二」。

12) 『廣志繹』卷3。

13) 乾隆『泰安縣志』卷2「風俗」

泰山香火歲動數十萬人，富者居坊肆之奇，貧者有香楮服勞之益，不耕不織待以舉火者不下數千百人。

14) 張岱『瑯嬛文集』卷2。

離州城數里，牙家送迎，控馬至其門。門前馬廐十數間，妓館十數間，優人寓十數間，向謂是一州之事，不知其爲一店之事也。到店，税房有例，募轎有例，納山税有例。客有上中下三等，出山者送，上山者賀，到山者迎。客單數千，房十處，葦素酒宴百十席，優僎彈唱百十群，奔走祇應百十輩，牙家十餘姓。合計入山者八九千人，春初日滿二萬。山税每人一錢二分，千人百二十，萬人千二百，歲入二三十萬。牙家之大，山税之大，總以見吾泰山之大也。嗚呼泰山。

15) なお嘉靖初年の段階でこれらの宿は數百にものぼった。(『泰山志』卷3，李鎔「姚別駕總巡泰山記」)宿屋については(吳廷文・蕭寶方1989)などにその詳細が記されている。

少なく、會を利用せぬ者は家族で行った (Bergen 1888)。このような會は宋代から存在したが (劉慧・陶莉 2004)、その記録が増え始めるのは明代中期であった¹⁶⁾。萬曆 24 年の『兗州府志』には「街の民が集まって會をつくり、東は泰山、南は武當を祀り、年の暮れに仕事がなくなると、十人百人と群をなして、結社して向かう。これを香社という¹⁷⁾。」とあり『鄒縣志』にも會の一例が示される¹⁸⁾。崇禎 5 年に編纂された『歷城縣志』巻 5 には「季春に多くの人が岱山に登り嶽社を結成する」とあり¹⁹⁾、「邑の善人、張自成が郷中の善信とともに香社を結成して泰山に一年一回巡禮した²⁰⁾。」という記録も見られる。臨邑縣にも「邑の人で結社して泰山に旅する者は、まず香楮を携えて娘娘廟に報告にやってくる。あるいは故意に〔泰山へは〕行かず、この廟にお参りするだけで止めてしまう者もいた。」という記録がある²¹⁾。このような記述は清末以降の地方志にも頻繁にあらわれる²²⁾。

では、彼らはどのように資金を集めたのか。中國における會の研究として先駆的なものに戦前の『中國之合會』がある (王宗培 1931)。この研究は、農村などで行われる頼母子講的な團體がどのように運営されているのか、どのように會員から金を集めて運用し、再配分するのかという問題を中國全土様々な地域について調べ、その具体的な様を分類して示したものであった。地域によって違いはあるが、満期を決めて資金を集め、年に何回か宴會などの名目で集まり會の運営について相談し、經濟的に困窮した會員に僅かな利子を付けて資金を融通しあったことは共通している。その資金は泰山巡禮などにも使われることがあった。これについては民國で編纂された『民事習慣調査報告録』にも興味深い例が見られる。山東省東北部に位置する沾化縣の習慣に「泰山香會」があり、會員から毎月 200～300 文を徴収し、利息を付け、3 年の満期を過ぎるとその資金をお参りのための原資にするというものである (前南京國民政府司法行政部 2000)。假に毎月 200 文として計算すると、1 人あたり最低 7200 文、さらに利息が付いた額が巡禮の費用になるわけである²³⁾。日本によって農村調査が行われた山東省恩縣後夏寨でも泰山老母をまつ

16) 王權「修天妃廟碑記」(乾隆『德州志』巻 12)、李若訥「臨邑醮會興衰記」(道光『臨邑縣志』巻 11)。

17) 萬曆『兗州府志』巻 4「風土志」
市里小民群聚爲會、東祠泰山、南祠武當、歲晚務閑、百十爲群、結社而往、謂之香社。

18) 『鄒縣志』巻 3。

19) 『歷城縣志』巻 5。

20) 道光『章丘縣志』巻 14 張國壽「重修女郎山泰山行宮記」。

21) 道光『臨邑縣志』巻 15 馬遷「泰山別廟紀勝碑」。

22) 例えば道光『商河縣志』巻 2、光緒『泗水縣志』巻 9。

23) なお同様の事例は地方志でも確認される。民國『封丘縣志』巻 2「地理、風俗」「朝山之俗、清季即熾、善道爲會首一人、執事數人、會友百餘人或數百人捐麥秋、每人每年各一斗、以作會費、圓會及朝山時川資均屬資費。」。

り平安を祈る集まりがあり、月に一回泰山老母の畫像を禮拜していたという (Duara 1988)。

これらの會では、實際に資金が集まると、黄色くて小さな三角形の旗を手に持ち、そして泰山奶奶つまり碧霞元君に泰山へ出發することを知らせるため、地元の廟で焼香する。そして、その廟に祀られている碧霞元君を乗せた御輿を擔ぎ、村あるいは街を練り歩き、周囲の人々に泰山への巡禮を知らせる。出發してからは基本的には徒歩で小さな旗を掲げ、銅鑼などを鳴らしながら進み、場合によっては驢馬や手押し車などを使って移動する²⁴⁾。纏足した女性にとってそのような移動手段の存在は重要であった。

その途上に香亭つまり碧霞元君などをお祭りした建物があるので、そこでもお参りをする。そして途上の宿に泊まる際には、碧霞元君の神像をしかるべき場所に安置し、儀禮を行う。これらの宿には碧霞元君の行宮を利用したことも多かったようである。泰山の麓にある泰安州城まで辿り着くと、ここでは會首の馴染みの宿に投宿する。その後、宿主の仲介で香税支拂いの手続きをしてから、山に登り、二回ほど支拂いのチェックを受けてから碧霞元君廟に入りお参りと寄進を行う。碧霞元君には旗・傘・扁額などから神像に着せる衣服まで様々なものが捧げられた。禮拜を終え、山を下りると同じ宿屋に戻って宴會を開き、その後、地元に戻ってからは、行きと同じ地元の廟に参拜して巡禮の歸還報告を行うのである。ここに述べた大まかな流れは今も昔も大きくは変わらないであろう。

このような巡禮者達は時に泰山の參道やその周辺の寺院に題記を残すことがあった。題記とは彼らが巡禮したり寄進したりした證に、石碑や崖などに自らの名前などを刻み込んだものである。このような題記は、中國全土に多數残されているにも関わらず、今までさほど注目されてこなかった。理由は主に二つある。ひとつは、このような題記は良い石に刻まれることは少なく、容易に摩滅・破損してしまうからである。人目に付く參道沿いに書かれたこれらの文字は、文革の際にも破壊の対象となりやすかった。文字が十分に讀めないものはとうぜん史料として適さない。もうひとつの理由は、假に讀めたとしても人名が列擧されるだけであるため、あまり史料價值を認められなかったからである。そのため、このような題記の存在は研究者の間でもほとんど知られてこなかった。しかしながら近年になって『中國文物地圖集』山東分冊の出版²⁵⁾、ならびに『泰山石刻』の出版²⁶⁾という一大プロジェクトの成果により、全體像が明らかになり

24) 他にも紀邁宜『儉重堂詩』卷3「泰山進香詞二十七首」には「黃旗竟向車前插，知是燒香士女歸」という一節があり、車の前に黄色い旗をさして進んだことがわかる。

25) 國家文物局主編『中國文物地圖集（山東分冊）』（中國地圖出版社，2007年）。

26) 袁明英主編『泰山石刻』全10冊（中華書局，2007年）。

つつある。

筆者はそのような題記が特に多く残されている靈巖寺で 2007 年にフィールドワークを行った。靈巖寺は泰山の北西 40 キロメートルほどのところにある名刹である。この寺は唐代以降大變に榮え、貴重な碑刻が大量に残っていることで有名であるが、寺志の凡例に「寺碑が林立するが、多くは塾師の低俗な筆や、山僧の作り話で、荒唐無稽で信じがたいものは、みな収めなかった²⁷⁾。」とあるように、文獻に收録されたのはステータスの高い人物によって書かれた一握りの碑刻に限られ、筆者が調査を行った題記については全く記されていない。本稿ではその調査結果をもとに多数の題記を分析することによって、17 世紀の泰山巡禮の實態を明らかにすることを目指す。

本稿の構成は大きく 2 つに分かれる。第 1 章では大量の題記が泰山北嶺にある靈巖寺に残された背景を考察した上で、いくつかの典型的な事例を紹介する。第 2 章ではそれらの題記をもとに作った一覧表を分析しながら、明末清初の泰山周邊でいかなる宗教活動が行われてきたのかを浮き彫りにしてゆく。

近年、泰山に関する新資料の發掘は著しい。一つ一つの史料の解釋にはまだ再考の餘地があるが、中國では大量のデータベースの恩恵もあってか、珍しい史料を引用した研究が増え、興味深い實例を示してくれるようになった。また、フィールドワークの成果や民俗學の成果によって、現在の巡禮の姿が明らかになってきたことは大變に喜ばしいことである。これらの知見を総合しつつ、題記という今までさほど活用されてこなかった史料を分析することによって、「泰山の巡禮の盛んさ」と言うすでに語り盡くされてきた事象にとどまらない、新たな歴史的事實をそこに見ることになるだろう。

第 1 章：靈巖寺大雄寶殿と題記の概要

第 1 節・靈巖寺に残る題記の意義

考察を始めるに当たって、泰山の巡禮を研究するために何故靈巖寺の題記を考察するのかその理由を述べなければなるまい。先程述べたように靈巖寺は泰山の碧霞元君廟から北西に 40 キロほど離れた場所にある。泰山に巡禮する際にはいくつかのルートがあったようだが、泰山の南側の泰安州城から登る人が大半を占め、北側から巡禮することは稀であった。しかもこの寺は、明代の行政區劃は泰安州ではなく長清縣に屬している。そう考えると泰山の一部と見なすのは違和感があるかもしれない。しかし、當時の文獻

27) 『靈巖志』凡例「寺碑林立，多爲塾師俚筆，山僧杜撰，荒唐難以取信者，概不收入」。

を紐解けば文人や巡禮者が泰山に登った折にしばしば足を伸ばす場所であったようで、今回紹介する題記にも上部に「朝泰山進香」[138]²⁸⁾などの語が残されており、王世懋も萬曆年間に「我が兄元美はかつて私にこのように語った。『靈巖寺は泰山の裏側でもっとも静かで美しい場所である。我々は泰山に登って靈巖寺にいたらなければ、〔泰山に〕遊んだことにはならないのである』²⁹⁾」と語っている。少なくとも本稿で扱う明末清初において靈巖寺は泰山の一部と考えられていたのである。

しかし、泰山周辺には大量の文物が残されている。わざわざ靈巖寺の題記を選んだのは他にも理由がある。それは量である。題記は大きな寺廟でも一箇所に10個から20個程度しか残っていないことが多いが、靈巖寺では本殿に埋め込まれた200以上の石に400を超える題記が残され、6000人以上もの名前が刻まれている。一箇所にこれほどの題記が集中していることは稀である。もちろん文字が摩滅しているものも少なくないが、これだけの量があれば、巡禮の年代や時期、地域といった傾向を分析することが可能となる。これが、あえて靈巖寺という泰山から若干離れた寺院の題記を分析する理由である。

これまで多数の書籍の中で泰山周辺の文物が紹介されてきたが、この題記について言及した研究は葉濤『泰山香社研究』のみである（葉濤 2009）。筆者は『泰山香社研究』のもとになる氏の博士論文（葉濤 2004a）によって本題記の存在を知った。葉濤氏はこの靈巖寺の題記をはじめとして泰山周辺に残る香社にかかわる史料を大量に収集し、泰山巡禮のための結社が明末以降かなり盛んに行われていたことや、現在の民俗ともかなりの共通点があることを明らかにしている³⁰⁾。

しかし、この題記については興味深い問題がなおも残されている。葉濤氏は靈巖寺の題記の多くをリストとしてその著書の巻末に掲げているが、そのデータは完全なものではない。これらの題記には基本的に地名・年代・名前しか書かれていないことから、彫りが浅く小さな文字については、釋讀を行っていない。しかし、筆者が刻まれた文字を実際に見てみたところ追加・修正可能なものは相當數に上った。しかも、葉濤氏が収集した情報は地名と年代のみに限られ、人名・人數は考察対象に入っていない。また、泰山周辺に散在する膨大な数の香會碑を、それが書かれた時期や場所などを考慮することなく、全て一律に扱ったため、靈巖寺の題記のもつ特殊性には十分な注意が拂われな

28) この番號は後掲の一覽表の一番左側にある通し番號に對應する。

29) 王世懋『王奉常集』卷10「東遊記」。

30) （葉濤 2004b）によれば文化大革命の際にも密かに巡禮が行われていた。それは堂々で行えないものであったので、親戚を訪ねるなどの口實で出かけていたという。

かった。そのため、地方志などの文獻に記載されている香會の状況との類似性ばかりが前面に出てくる結果となった³¹⁾。年代・地域・規模など様々な側面について項目を立てて情報を分類した上で、この題記が残された時期に注目しながら見てゆくと当時の泰山とその巡禮をめぐる多様な事実が明らかになるのではなかろうか。また、個別の題記についても興味深い事例に事缺かない。これらを紹介することは、当時の社會状況を知る上でも有用であろう。

筆者は 2007 年に葉濤氏と連絡を取り、題記の具體的な場所について貴重なアドバイスを受けた上で、実際に靈巖寺を訪れ大雄寶殿の壁に埋め込まれている石を一つ一つデジタルカメラで撮影し、そのうえで可能な限り詳細に録文を作成した。その全てを本稿で提示することは出来ないが、特徴的なものについては随時示してゆきたい。

崇禎初年に泰山を訪れた張岱はこのような感想を語っている。

山中に恨むべきものが二つある。乞食がその一つであり、もう一つは進香姓氏で、それぞれ小さな碑を立てたり、岩壁に名前を刻んだり「萬代瞻仰」とか「萬古流芳」などとあっていやらしい³²⁾。

今回紹介する題記もおそらくそういったものの一つに数えられよう。このように忌み嫌われ無視され續けていた人々の名前の連なりを仔細に讀むとどのようなことがわかるのか、実際に見てみよう。

第 2 節・題記の現状

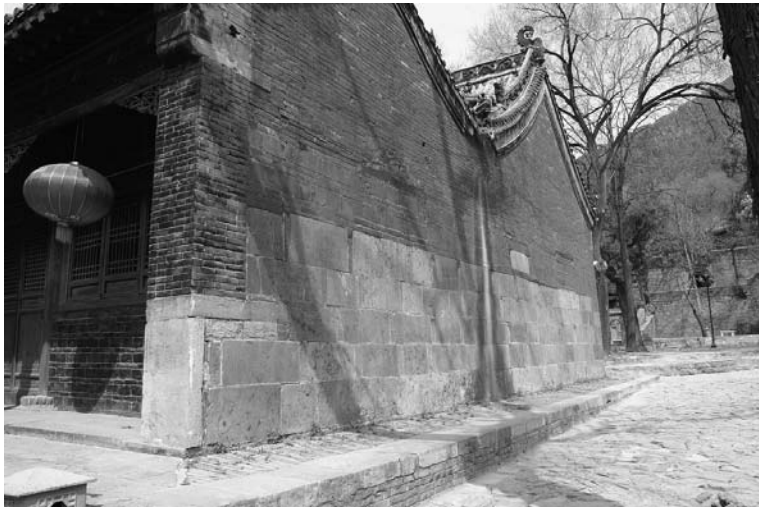
まずは次頁の〔寫眞 1〕を見てみよう。これが靈巖寺の大雄寶殿である³³⁾。一見すると何の變哲もない佛殿であるが、壁の色合いが上下でやや異なっている。この上側が通常の壁の部分、やや薄い色合いの下半分が、題記の書かれる石板が埋め込まれている部分である。大雄寶殿は通例通り南向きに立てられているが、その正面部分を除いて東・西・北の三面にこのような石が埋め込まれる。本稿で分析を行うのはこの 200 近い石に書かれた文字である。

この石をよく見てみると、同じ大きさの石がびっしりと竝んでいるのではなく、ところどころ文字の書かれていない細長い石が間に埋め込まれていることがわかる。中には

31) 『泰山石刻』の中でこの題記が寫眞付きで紹介されているが、録文も少なく、寫眞も極めて小さいため、文字が讀み取れるものは限られており、情報として充分ではない。なお武當山については梅莉氏が相當数の碑刻を収集されており、(梅莉 2007) の卷末に一覽が掲載されている。

32) 張岱『瑯嬛文集』卷 2「岱志」。

33) 大雄寶殿の東西南北の寫眞は(葉濤 2009 pp. 26-27) も参照されたい。



寫眞1 靈巖寺大雄寶殿東側

中途半端に途切れている石、破損している石もある [194]³⁴⁾。そして一部の石にはチョークで番號が書かれている。これは外すときに順番を間違えないようにするための措置ではなかろうか。こういった状況から考えると、これらの石は一度何らかの理由で壁から外され別の場所に保管されていたものを、再び詰め込め直したものではないか。石の並び方をみると、年代の近いものが固まっていることもあり、あるていど昔の姿に忠實に復元しようとした跡がみられるが、チョークの番號もランダムであり、破損して原形をとどめていない石もある³⁵⁾ことから、はめ込み直すのに苦心した様が見て取れる。無理に詰め込みなおそうとしたのか、外周を微妙に削ってしまっているような石まである³⁶⁾。また、[寫眞1]を見ても分かるように、東西の壁の中央部分に屋根の水を排水する部分があり、その汚れがこびり付いて石を覆い盡くしているため文字が全く見えなくなっている部分がある³⁷⁾。これらの部分に関しては残念ながら文字を読み取ることは出来なかった。題記の中には、先に彫られていた文字が消され、その上に改めて文字を彫ったように見えるものもある³⁸⁾。このような状況から考えると、明末清初の題記の原

34) この番號は卷末の一覽表の左端に記した通し番號に對應する。

35) 例えば [121] [133] [157] など。

36) たとえば、居住地を「大明國」という言葉で書き始める場合があるが、[78] では「明國」となっている。これは「大」を省略したのではなく石の上部が削られた結果ではないか。

37) 後掲の一覽表では▼で示している。

38) たとえば [208] に書かれる「靈巖標名」の靈という文字は下半分が消えている。また [333] では左半分は文様で囲まれた中に題記が書かれるが、文様の右端が不自然に切れ、

形を完全に留めているとは言えないかもしれないが、全體の傾向を掴むのには差し支えないだろう。では具体的にどのようなことが書かれているのか、以下に見ていきたい。

第3節・データの集計方法

今回の調査に当たって、可能であれば全ての題記の録文を提示し、詳細な注を加えるのが理想であったが、数も膨大であり、とても通常の紙幅には収まらない。本稿ではいくつの特徴的な題記についてのみ寫眞と録文を提示することにし、残りは【靈巖寺大雄寶殿題記一覽表】として巻末に掲載し、その全貌を示すことにした。では、どのように一覽表を作成したのか、典型的な題記を例にとって説明してみたい。【寫眞 2】を見てみよう。



寫眞 2 靈巖寺題記 [315]

これは大雄寶殿の西側の壁にある題記で、一覽表の通し番號では [315] にあたる。全體は一本の線で圍まれ一番右側には居住地が「大明國山東兗州府濟寧州西鄉等各圖民見
在城西河長口疇里集居住」と書かれ「修醮施財」を行い、それが馬子才という會首によって組織されたものであることがわかる。馬子才も含めて總勢 16 名の名前が右から左へ列擧されているが、人名から判斷するとここに書かれているのはすべて男性である。なおこの題記の場合は文字が比較的整っており、彫りもしっかりしているが、「刘應聘」

石の右半分には異なる字體で文字が刻まれている [331]。これらは、すでに書かれていた文字を消して、その上に彫り直したのかもしれない。

のように俗字が使われている³⁹⁾。左下の三名については字體が他の文字に比べて拙いものの、ひとまずこれも同時期に刻まれたものと考えておく。最後の行に「萬曆參拾捌年貳月貳拾伍日立」と日付が記され、その下に「施銀五錢」と寄進額が書かれる。これが會全體の寄進額にあたる。これらの情報を以下のような形でまとめた。

No. (1)	[315]
文様	△
No. (2)	W29-0
年號	萬曆 38 年
西曆	1610
日付	0225
冒頭	大明國山東兗州府濟寧州西鄉等各圖民見在城西河長口疇里集居住修醮施財
末尾	萬曆參拾捌年貳月貳拾伍日立施銀五錢
上部	——
省	山東
府	兗州
州	濟寧
縣	——
會首氏名	馬子才
總人數	16
女性	0

これらを表にまとめたものが卷末の一覽表である。なお寄進額はごく一部にしか書かれていなかったため、項目を立てていない。各題記は複雑な形態をしているもの、文字が缺けるなどしていて情報が不十分なものもある。そのような場合の扱いについては一覽表の冒頭に載せた【凡例】を参照されたい。次に複雑な形をしている題記 [33-35] を

39) また、「大明(→名)府」[109]や「西按(→安)府」[270]のように同音異字も頻繁にあられる。「虞城縣成(→城)東北」[168]「信仕(→信士)」[179]のような一般名詞にも誤りがある。人名についても我々が気づいていない誤字があるに違いない。また「山東濟衛」[85]「王家居住」[375]のように、彫り忘れた文字を挿入したような杜撰なものもある。このような文字の間違え方をしているということは、刻工が下書きをせず、音を耳で聞いて彫り込んだ可能性や、寄進者が文字を理解していなかったたのでその誤りを訂正できなかった可能性もあるだろう。

靈巖寺題記 [33-35]

第4節・字板設置の経緯

[82]

来について葉濤氏は何も述べていないが、東側の石板のひとつに刻まれた「靈巖寺重修大佛殿募緣疏」[11] という文章にその経緯が具体的に記されている。長文ではあるが引用してみることにしよう。

聞くところに據れば、森の樹木を布施して〔寺院を建てた〕祇陀は福が三千界を覆い、布金の長者は、名聲が億萬年ものあいだ傳わったという。果てなき福德を永遠のものにするには、有漏^{うろう}の資財を喜捨しなければならない。六度四攝は布施をもって最も大事なこととしているのである。

いま大佛寶殿の中には皇明の藏經を収めているが、長い年月を経て、垂木や梁はそろわずに抜け落ち、屋根瓦や敷石も壊れ、風雨が徐々に入り込んで、經典や佛像を痛めてしまい、朝晩ごとの祝延にも不都合をきたしており、見るに忍びがたいものであった。

本寺の釋子慶珠は、剃髪して佛門に歸依してからというもの、教えに補うところなく、佛法は危うくなり、傍觀にたえない状況であることを懸念し、これを修築しようと思っていたのだが、力及ばずそのままになっていた。幸にして青城の韓邦明なる善人が、この寶殿が傾き崩れているのを見て心中忍びず、さらに「人生の福德は、みな平素から善因を植えることによって、現在の樂果を感じるのであるから、いまもしも修築しなければ、將來どうして盛んになることがあろうか」と思い、そこで自ら金二百兩を寄進することにし、かくして寺僧慶珠に相談をもちかけた。

珠は喜んで承諾してこのように言った「これはもとより私が願っておりましたところ。ご自分が幸福になればそれはそれでよろしいのですが、大勢の人に募って心を合わせてともに事をなした方がよろしいでしょう。〔ご自分のことばかりお考えだという〕小乗獨善のそしりを免れることができますようから。」そこで十方の貴官・長者・善信・檀越を募り、敷石・屋根瓦を提供する者は審ごとに銀伍兩、石灰を提供する者は審ごとに銀三兩、あるいは米穀や賃金を喜捨したり、或いは疏頭（喜捨を求めるときに用いる冊子）によって別の善信に布施を請うたりと、思うままに喜捨をしてもらい、多寡を問うことはなかった。そして字板三百餘尺を置き、それぞれ題名を刻して芳名を記し、殿壁の間に安置して永遠に残し、後の世の人々にこの善行を行った賢者に倣おうと思わせ、この幸いをを伝えさせるのである⁴⁰⁾。

40) 蓋聞、施樹祇陀福陰三千之界，布金長者名傳萬億之春歟，永無邊之福德，須捨有漏之資財，六度四攝，莫不以施爲首務也。今茲大佛寶殿內貯皇明藏經在中，年深藏久，椽杙差脫，磚瓦圯拆，風雨侵損，有傷經像，每於晨夕祝延未便，瞻者誠不堪忍也。本寺釋子慶珠念自披剃空門無補於教道，法顛危不堪坐視，意歟修整力微無助。幸有青城善人韓邦明，見茲寶殿

修築が完了しこの文章が石に刻まれたのは萬曆 35 年（1607）の 1 月 15 日であった。韓邦明については詳らかでないが、[4] には「欽依□□施財修殿壽官韓邦明」とあり、彼に「壽官」の肩書きが加えられているので、高齢の人物であったことがわかるのみである⁴¹⁾。慶珠はおそらくは靈巖寺の高僧であろう⁴²⁾。この石には、この修築に携わった木匠らの名前も列挙されている。「敕賜護國靈巖禪寺焚修住持率領合山僧衆助工折殿題名記」[4] と書かれた石には多数の僧侶の名が記される。ここに列挙される僧侶達はおそらくは工事に参加するなどの貢献を果たしたと推測される。折殿という名前の建物が靈巖寺に存在したという記録はないから、おそらくはこの大雄寶殿のことを指しているのだろう。折殿とは「こわれた建物」くらいの意味と考えれば良いのではなからうか。さらに [4] には「白衣院施財信僧」が 18 人列挙されている。白衣院は白衣觀音を祀った建物であり、参拜者も多かったであろうから、ここには比較的資金があったのかもしれない。

このような萬曆 35 年 1 月に彫られたことを明確に示した題記は [4] と [11] の二つだけである。しかしながら先程の文章を見る限り、かなりの人々がこの建物の修築に寄與したことが推測される。そこから考えると、この時期の寄進を示す題名はもっと多くて然るべきであろう。これらの題記を通して見ると、年代こそ書かれていないが、上記二つの石と同じような唐草文様で囲まれ、字體も似通った石板がいくつか見つかる。例えば [5-8] は地名と人名しか書かれていないが、形式は似ている。[53-56] という右半分が缺けた石についても年代が書かれた形跡こそないが、同じような形式が見られる。[258-260] [261-265] など同様である。書かれた文字に忠實に判断するのであれば、これらの石板については年代の確定を保留した方が良いのかもしれないが、筆者はこのような石板も同じ時期、つまり萬曆 35 年に彫られたものではないかと推定した⁴³⁾。全體の傾向として早期の石板であればあるほど文字は大きく整っており、文様も

傾頽、心中不忍、猶念人生福德皆由夙植善因感今樂果、今若不修當來何昌、迺自捐金二百兩、遂謀寺僧慶珠。珠忻然而諾曰「茲固余之所頃也。雖自植福則可矣、莫若募衆同心共濟庶免小乘獨善之謂也。」因此告募十方貴官長者善信檀越、或管磚瓦者每密用銀伍兩、或管石灰者每密用銀參兩、或捨食米工價、或□疏頭轉化善信、隨心喜捨、不拘多寡、□置石板三百餘尺、各各刻題名字芳名、安置殿壁之間、以垂不朽、俾將來者見質思齊、以揚厥休矣。

41) 壽官の稱號は規定上では 80 歳以上の人物に與えられたが、明末になると實際には、50 歳程度の人物でもこの稱號を名乗ることが許されていた（邱仲麟 2000）。

42) なお「玉光」なる僧侶の名が刻まれた石板が複数ある。[336] の左下の部分に「□官玉光諱慶珠」と記されていることから、この人物が慶珠のことであることがわかる。萬曆年間の石板に文字を刻む際には彼が關與していたとみて間違いない。

43) 推定値については後掲の一覽表では斜體で區別している。

美しいが、時代が下るにつれ文字が雑になり、彫りも浅く、文様も消え、あったとしても萬暦 35 年頃のものほどは美しくない。では、なぜ地名だけはしっかりと記入しているのにも関わらず、その日付を記さないものがあるのか。それは、記さなくても自明だったからではなからうか。もともと石板は萬暦年間の修復の際にはめ込まれたのであるから、同時期のものであれば、わざわざ年代を注記せずとも困ることはなかったであろう。萬暦 35 年と推定した題記が多いのはそのような理由による。それに、これだけ大々的な事業を行い、多くの人に呼びかけて、合計 300 尺もの石板を用意したにも関わらず、二、三枚の板に題記が収まったと假定すると、萬暦 35 年當時の大雄寶殿の壁は大變に寂しいものであったことになる。それは少々想像しがたい。

なお、300 尺は約 90 メートルになるが、石の大きさを實測したところ字板の横幅は 90 センチメートル前後、縦は 50 cm のものが多かった。300 尺が石板の横の長さを足し合わせたものとすれば、現在残っている石板よりもずいぶん少ない。つまり、ここにある字板は題記を刻むためのキャンパスとして萬暦 35 年に設置されたものと、そのつど追加されていったものの 2 種類に分かれるのではなからうか。とくに北側に關しては字板の色合いがずいぶん異なる。最初に設置された字板は東西の部分だけに限られ、その後、寄進者が増えるに従って北側の部分にも増設されていったのかもしれない。

萬暦 35 年の早い段階で修復事業は一段落したはずであるから、用意した石板は萬暦 35 年の段階では埋まらなかったことになる。その後、餘った石板に次々と他の人々の名前が刻まれていったのであろうか⁴⁴⁾。また、出資者の韓邦明と同じ青城縣からの寄進も見られ [12]、各人が字板一枚を購入したり、柱の基礎を寄進したりしている。[83] には「重修齋廚施財信士」という名目で別の建物である齋廚、つまり厨房にあたる部分の再建に寄進が行われたことが記される。この時期には、參詣によって多くの資金が流れ込むことによって、老朽化が進んでいる建物が次々と修復されていったと見える。また、[79-80] のような題字は士大夫の寄進とひきかえにスペースが提供されたと考えて良いだろう。その他にも士大夫の題詩が 11 ほど残されている。基本的に明末に限られ、修復事業を讃えるものや、靈巖寺の風景の美しさを歌ったものなど多様である。これも寄進と引き替えにこういった作品を刻む権利を得たに違いない。

寄進額を明示した石板は少ないが [333] では合計 2 兩以上の額が寄進されている。一人あたりで換算すると 5 分程度になり、當時はひとり 8 分であった香税よりも少ない額

44) なお、萬暦 37 年の題記は全て西側の壁に填め込まれている。また、萬暦 43 年以前の題記は大半が西側のものであることから、參詣路沿いで人目につきやすい西側から彫っていった可能性もある。

になる。泰山にお参りに來ることができるような人々であれば、懷はさほど痛まなかったであろう。

寄進を行った人々は實に多様である。詩文などを残した士大夫だけではなく僧侶の名前も時々現れるが、よその寺から集團でお参りに來ているものはない。僧侶や道士が人々を率いて名山まで巡禮に行くこともある⁴⁵⁾。しかしながら、本題記を見る限りでは僧侶が會首を務めていることはないし、會の中で特別な役割を果たしているわけでもなさそうだ。佐々木衛氏の報告でも泰山會に参加する僧侶はリーダーになることはなく隨行するだけであることが明らかにされている（佐々木 1992）が、これと似通った状況であると言うことが出来るだろう⁴⁶⁾。

數はさほど多くはないが、王府や宦官の名前も見られる。例えば王府からの事例は [133-135] などに見られるが、いずれも藩王とその一族の名前が刻まれる。宦官については香税の徴收などのためにしばしば泰山にやってくるのは間違いない。しかし、ここにはそういった職務、あるいは皇帝や皇太后の命令によりやってきたという記録はない。[114] は、人名以外なにも書かれてはいないが、おそらくは、宦官達が個人的に組織して行った巡禮であろう⁴⁷⁾。

それ以外にも軍籍にある人々 [48]・生員などの下級知識人 [112]・さらには數多くの女性など多種多様な人々がやってきている。名目上はここに題記を刻むためには、一錢も拂う必要は無いことになってはいたが、おそらくは幾ばくかの額を拂うことなしには自らの名前を残すことは出来なかったに違いない。5兩もの金額を寄進できるような個人はごく一部に限られたであろうが、1錢という泰山の香税とさほど変わらない額の寄進をした人物の名前も見られる。このような題記を残した人々は金銭的に餘裕のない最下層の人々である可能性は少ないだろうが、かといって特別に裕福でなければ残せないほどの高額なものではなかったはずである。

後述するが、現住地を見てみるとその多くが村・庄・郷・保・里といった農村である。しかし、それと同時に縣城の内外に居住しているものが 33 例あり、さらに關、廂といった郊外の地域も含めれば、都市に居住している人々もかなりの割合を占めている。もともと農村に住んでいたにも関わらず、現在は城内に居住しているという [200] のような

45) 『聊齋志異』第 16 回。

46) 香會と僧侶の関係については『燕臺文選初集』卷 2「四方朝元君者殆無虛日」にも後を付き従う僧侶の姿が書かれる。

47) 泰山の麓にある斗母宮前には天啓 3 年に立てられた太監らによる石刻が残されている（『泰山石刻』p. 689）。

例も複数見られることから、あるいは城居地主化した人々なのかもしれない。いずれにせよ、都市に住むこれだけの数の人々が題記を残していることは、当時の都市における経済の好調ぶりが反映されているのではなかろうか。

ここに題記を残した人々が特定の階層に属するわけではないだろう。おそらくは経済的事情に従って、裕福な者は家族で、ある程度の余裕がある者や、會を作らないとどうしても巡禮できない貧しい人々が、會首のもと資金を貯めて泰山までやってきていたはずである⁴⁸⁾。しかしながら、徽州文書で見えるような口語的な名前は、この題記にはほとんど現れない。「登科」などの名前に至っては明らかに科擧の合格を願って付けられた名前であろう。このような名前の傾向から、巡禮者の素性をもう少し詳しく追うことができるかもしれない。

なお題記の大半を占めるのは、香會が残したものであるが、中には家族で巡禮した際に寄進したことを示しているものもある。以下の [366-368] を見てみよう。

萬曆三十七年四月初八日立	胡從正 妻康氏	張國相 女元官 朝官	女鳳姐 存姐 節姐 仲姐	男律時	丁履豐 妻康氏	男楊世忠 妻霍氏	楊日元 男婦霍氏	次男楊日輝	紹興府餘姚縣人氏	谷炳 妻魏氏	男谷陞 男婦陳氏	楊能賢 妻楊氏	女鳳姐	金德賢 妻楊氏	楊文龍 妻朱氏	男楊國祥	孫男 楊洪源 孫女 珠姐	次男 楊國裕 女德姐	長男 楊國禎 男婦陳氏	楊文魁 妻王氏 陳氏	浙江金華府義烏人氏	程經	男程望東 長女老姐 次女春姐	會首程 宣 妻張氏 王氏	山東濟南府德州人氏	參次禮懺齋僧捨財碑記
--------------	---------	------------	--------------	-----	---------	----------	----------	-------	----------	--------	----------	---------	-----	---------	---------	------	--------------	------------	-------------	------------	-----------	----	----------------	--------------	-----------	------------

靈巖寺題記 [366-368]

三つの團體の名前が同じ字體で書かれており、その最後に日付が書かれている。一番右側の題記には冒頭に會首程宣と書かれてはいるが、それぞれの出身地は全く異なっており、別々にやってきた團體が現地でたまたま一緒に儀禮を実施し、その際に寄進をし

48) 本稿では先學の研究に従って香社・香會が巡禮や寄進に極めて大きな影響を與えていることを前提に議論している。しかしながら、20世紀に妙峰山の香會を扱った研究は口々にその比率の低さを述べる。定縣で農村調査を行ったことで有名な李景漢は、その比率はわずか20%程度であったと語り、Tung Fu-mingは5%ほどでしかなかったと述べている(Tung 1939)。

て共同で名前を刻んだのではなかろうか。おそらく、佛誕の日には靈巖寺に參詣する人も多かったであろう。なお3つの團體はいずれも家族で泰山にお参りに來ている。最後の餘姚縣の人々については、複数の家族がともにやってくるように見える。文獻には長江以南から泰山に巡禮する事例はほとんど記されていないが、この題記はわずかに一例とはいえ江南からはるばる泰山までお参りに來ていた人がいたことを明らかにしてくれる。

このように、靈巖寺に残る題記はいくつかの個別の事例を見るだけでも、當時の泰山周辺に廣範な地域から様々な形で巡禮を行った人々がいたことが明らかになる。では、これらの題記の全體的な傾向をとらえることは出来ないだろうか。次章では、一覽表をもとに考察してゆきたい。

第2章・題記の分析

本章では靈巖寺大雄寶殿の題記を一覽表に基づいて考察してゆく。「年代」「時期」「地名」等に項目を分かち、その特徴と、それがいかなる歴史的事實を反映しているのか考察を加えたい。

第1節・年代分布

(i) 題記の斷絶

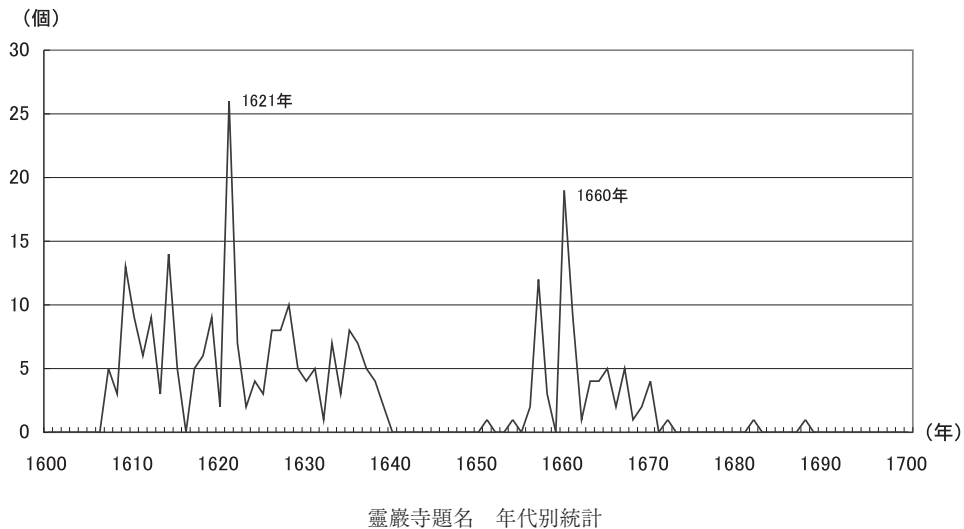
まずは年代の考察を行う。従來の研究では泰山の巡禮は明末から現代に至るまで戦亂の時期を除いてずっと盛んであった、という見解が出されてきた。しかし、靈巖寺の題記が示す状況はそれとは異なる。次頁のグラフを見てみよう。

一見して分かるように年代によって大きく差ができています。はじめに全く題記が確認されない年代に注目してみよう。

まず明代には1616年（萬曆44年）に空白があるが、これは當時の激しい飢饉の影響だろう⁴⁹⁾。より顯著なのは1640年（崇禎13年）から1650年（順治7年）までの10年間である。この時期にはまったく記録がない。これは明清交替期の戦亂が影響していることは間違いない。華北各地で戦闘が繰り広げられたために民衆が巡禮を行う餘裕がなかったことはもちろんだが、靈巖寺の寺志である『靈巖志』にも「崇禎13年から順治6年までは盜賊がこの地を巢窟とした」ことが記されている⁵⁰⁾ように、この寺も荒れ果て、巡

49) 張岱『陶庵夢憶』卷7「西湖香市」など。

50) 『靈巖志』卷2。



禮を受け入れられるような状態ではなかった⁵¹⁾。明末までは鬱蒼と生い茂っていた境内の木々も、混乱の中で伐採され、かつての景観は失われてしまった。このような状況はおそらく題記そのものにも現れている。崇禎8年(1635)の題記[85]を見ると文字はそれなりに大きいものの極めて拙い。これは崇禎年間に入るともはや優秀な刻工を調達できなかったことを示しているのではなかろうか。

その後1650年代には増減を繰り返すが、60年代には2~5團體で安定し、70年代以降はほとんど無くなる。この時期に題記がなくなることを泰山巡禮の衰えと結びつけることには留保が必要だろう。三藩の亂が終わり、臺灣の鄭氏政權も歸順した康熙20年代(1681-1690)には各地の寺廟が復興し、泰山も間違いなく賑わっていた。その證據に、泰山周囲の碧霞元君の行宮には康熙20年代から30年代にかけて香會によって立てられた小さな碑が多数残る⁵²⁾。康熙41年(1702)の舉人である邱嘉徳も泰山の碧霞元君廟の賑わいを伝える。武當山でも康熙22年(1683)頃から乾隆年間までが巡禮の全盛期であった(梅莉2007 p.64)。巡禮は清朝中期に極めて盛んに行われていたはずである。さらに雍正帝の逝去後、香税が廢止され⁵³⁾たことにより民衆はより容易に泰山巡禮を行えるようになった。張體乾は『東遊紀略』の中で乾隆年間の巡禮の賑わいについてこのように述べる。

51) 『靈巖志』巻5には順治6年の呂朝輔の詩が收録され、靈巖寺には僧侶もほとんどいなくなっていたことが記される。

52) 『泰山石刻』p.618。

53) 『清實錄』高祖實錄巻7。

傍午に泰安に至り、城西の賓館に宿泊する。この旅館は 1000 人を泊めることができる。主人は「隣の宋氏の旅館は 3000 人ではすみませんぞ。」という。顔黃門は「河北では萬斛の舟があると言っても信じず、江南では 1000 人もの天幕があると言っても信じないというがまったくそのとおりであるぞ」と言うのであった⁵⁴⁾。

この宿の規模の大きさから考えると、泰安の街はまさに明末に匹敵する賑わいを見せていたことになる。この時期には香税が免除され巡禮が増えていたことも合わせて考えると⁵⁵⁾、巡禮自體は康熙年間に境に斷絶することはなかったと斷言できる。

では題記を彫り込むことができる場所がなくなったのであろうか。確かに壁の大半は題記で埋まっている状態である。しかしながら、順治年間のような小さな題記を彫り込む餘白はいくらでもある。葉濤氏は、大雄寶殿の後ろの五花殿という建物に填め込まれている石に題記の跡が残っていることを指摘するが、筆者が調査した際に文字を確認することができなかった。今後改めて調査する必要があるだろう（葉濤 2009 p. 25）。

（ii）題記の増加と徐鴻儒の反亂

次に、飛び抜けて題記の数が多いい年が何回かあることに注目してみたい。この石板に刻まれた題記の数が巡禮者の總數をどこまで反映しているかは議論の餘地があるが、天啓元年（1621）と順治 17 年（1660）に、とりわけ多くの題記が残されていることは何らかの意味がありそうだ。

實は天啓元年は極めて重要な時期である。徐鴻儒の亂が起きたのが天啓 2 年の 5 月であるからまさにその直前に急激に題記の数が増えているのである。天啓元年から天啓 2 年の 4 月までに 30 以上もの題記が集中していることから、巡禮者もとりわけこの時期に多く、さらに題記を残そうという意欲も高かったことが看取される。この時期の山東を題材にした小説である『樵史通俗演義』には以下のようなシーンがある。

さすが丁寡婦である。300 あまりのうちから 10 人の有能なものを選んで香頭とし、泰山進香の旗を 10 枚つくって、香頭一人につき一枚の旗を持たせてお参りに行く人々を集めた。（中略）丁寡婦は 2 月 11 日 12 日に出發して、3 月 1 日に泰山に登って焼香することを決めたところ、世間を大いに賑わせた。とるにたらない鄆城縣のなかには、白蓮教徒もいれば、ほんとうにお参りに行くものもいて、あわせて 2000 人が泰安州にむけて出發することになったのである⁵⁶⁾。

天啓初年にこれだけ盛んに巡禮が行われていたことから考えると、この泰山巡禮のシー

54) 張體乾『東遊紀略』（『四庫全書存目叢書』史部 128 冊）。

55) 程穆衡『燕程日記』（瓜蒂庵藏明清掌故叢刊）。

56) 樵子編輯『樵史通俗演義』第 4 回（人民文學出版社、1989 年）。

ンは、全くの虚構ではなく、かなりの部分が史實に基づいて書かれているのかもしれない。民間宗教結社の人々にとっても泰山は掛け替えのない聖地であったのだ。

この時期の題記は数が多いだけではない。個別の題記にも、その他の時期のものとは異なる特徴を見て取ることが出来る。例えば [225] の會首吳珮らの題記は大變に興味深い。

天啓元年十月初五日	大明國直隸徐州城東北江庄村各鄉人氏
會首	吳珮
李時賢	彭疇
范一登	尙文進
范一科	李時梅
范一連	李應田
孟世虎	劉登
吳守□	王可大
李枝	李應田
郭子□	李時梅
王寧	范一連
鄭林	彭疇
馮世龍	李時賢
王本勝	尙文進
裴正	吳珮
王世龍	
闕九安	

靈巖寺題記 [225]

徐州府城の東北にある江庄村という農村からやってきた彼らは、最初の巡禮を天啓元年 10 月 5 日に行った。最初のメンバーは 13 人。その下にさらに吳珮を筆頭とする人々の名前が書かれている。人名の順番に若干異同があるものの、同一人物が複数刻まれ、さらに新しいメンバーを加えている。ここから考えると、第 1 回のメンバーを核として新たな参加者を募り、改めて靈巖寺にやってきたのだと考えられる。日付は分からないが字體がかなり似通っているので、同一人物によって彫られたものではなかろうか。

天啓二年三月初三日立石	大明國直隸徐州城東北江庄村各鄉人氏
會首	吳珮
李時賢	彭疇
尙文進	尙文進
李應田	李時梅
范一登	范一連
范一科	范一連
李時梅	李應田
李應田	劉登
□可大	孟世虎
吳守忿	吳守忿

靈巖寺題記 [170]

さらに [170] も吳珮らが残した題記である。これを見ると天啓2年3月3日に再び吳珮を會首として巡禮を行ったことがわかる。徐鴻儒の亂が勃發する2ヶ月前のことであった。このメンバーはおそらく第1回のメンバーと完全に一致する。通常であれば年に一度か數年に一度泰山巡禮を行っていたことを考えると、半年に一回というペースでの巡禮は異例である。よほど特別な事情があったと考えるべきであろう。

また、[225] の天啓元年10月の人名と [170] の天啓2年3月の人名が同一であること、[225] の天啓元年のメンバーの下に書かれた18人の名前は残り二つと比べて何人か出入りがあることを考えると、おそらくは天啓2年3月以降にやってきた人々の名前が書かれていると推測できよう。字體はさほど變わっていないので、天啓2年3月からさほど時間を置いていないのかもしれない。そして、一部のメンバーの名前が消えているのは、巡禮をやめた可能性もあるが、徐鴻儒の亂による混亂の中で何人かが命を落としたからかもしれない。

萬曆37年(1609)に彫られた文字と思われる [346] には濟陽府夏口鎮の人々の名前が刻まれているが、その中にこのようなフレーズがある。

「弓長助工本無明，者卩顯有巳人通，古今凡聖人難變，龍蛇混雜認不眞」

筆者はこの句の意味を正確に捉えることができていないが、冒頭の「弓長」とは大乘圓頓教の創始者である張某のことであろう⁵⁷⁾。泰山巡禮者の中にこのような民間宗教を信仰していた人々が含まれていたことは間違いない。

なお天啓7年(1627)には靈巖寺でかなり大規模な宗教儀禮が行われていた。これを示すのが [96-98] の三つである。右から左へ三つの石が竝んでいるが、[96] の一番右側に濟南府歷城縣の縣城の北にある大柳樹村に居住している人々が僧を招いて三日三晩儀禮を行った際に残された題名であることが記され、そのあとに會首の陳天才と王乙才の名前が書かれる。その後、左端まで隈無く人名が刻まれるが、日付はなぜか刻まれていない。左側にある [97] も名前がひたすら書かれているだけである。その左側にある [98] は右端から題名が始まり、左端の方になるとようやく少しだけ餘裕のある空間取りになり、末尾に日付が書かれる。最後の部分に「建醮」と書かれていることなどから推測すると、これは3つの石がセットになっていると考えた方が良さそうだ。この推定をもとに考えれば、500人を超す人々が會首の組織のもと、天啓7年の4月2日前後に晝夜3日間にわたる宗教儀禮を行い、その名前を堂々と記している極めて珍しい記録と言うことになる。「造聖大駕」とあるので神を祀るための御輿を作成したのであるが、いかな

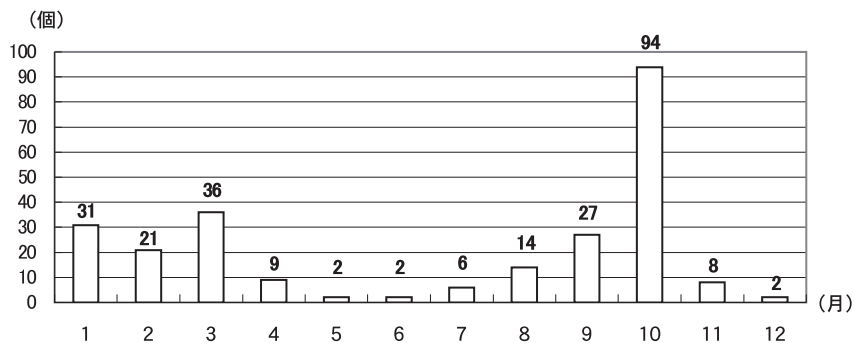
57) 弓長については(浅井1990)などに詳しい。

る神明を祀ったのかは定かではない。徐鴻儒の亂など不穏な時期が続いていたにも関わらず、官の側ではこのような大規模な會の実施を止めることは出来なかったのである。

天啓初年に題記が多いことは以上のような事情から説明できるが、順治 17 年については現時点では答えを見つけ出すことが出来ていない。偶然か、それとも宗教反亂には至らないまでも、天啓初年と變わらぬような宗教的感情の高揚が見られたのであろうか。今後、改めて考察したい。

第 2 節・巡禮の時期

次に巡禮の時期について考察しよう。先述のように、地方志等の諸文獻によれば泰山への巡禮は 1 月から 4 月までと 9 月以降が盛んで、とりわけ春に集中し、夏場はほとんど巡禮者は居なかった⁵⁸⁾。「春の間は往來することまるで蟻のようだ⁵⁹⁾」とか「三月から四月は多くの士女が碧霞元君廟に登るので足の踏み場もないほどであった⁶⁰⁾。」といった記録は實に多い。『醒世姻縁傳』も 4 月 18 日は泰山の頂上奶奶の誕生日であり、各地から人々が巡禮や商賣に集まってくるとしている⁶¹⁾。それはもちろん清末以降もかわらない⁶²⁾。では、この題記からも同じような傾向が見て取れるのであろうか。



靈巖寺題名月別統計

上に示す【靈巖寺題名月別統計】は、確かに春（1 月～3 月）と秋（7 月～9 月）に巡禮が

58) Mullikin によれば 2 月と 3 月、播種前の時期が盛んであった (Mullikin 1973 p. 62)。

59) 『廣志繹』卷 3。

60) 于慎行『穀城山館集』卷 16。

61) 『醒世姻縁傳』第 68 回。

62) 『泰山石刻』p. 788 「毎歳入春以來、香侶雜沓、鐘聲佛號、曇月不絶。」。

多かったことを示しており、先行研究が明らかにした傾向とある程度一致している。しかしながら、10 月だけが突出しているのは不思議な現象である。10 月に泰山に巡禮を行うという記録も少なければ、この時期に特に巡禮が盛んであるとする記録も全く存在しないのである。あるいは巡禮者が、本格的な冬を迎える前に駆け込みで巡禮に来たのであろうか。

ここで注目されるのが『岱史』に記された泰山の香税にかんする記録である。従来は總額の多さにばかり目が向けられ、割合についてはさほど注目されていなかった記述であるが、『岱史』巻 13 に記された嘉靖末年の香税の額は、1 月から 4 月には 10,000 兩、9 月から 12 月には 12,000 から 13,000 兩が中央に送られるとある。つまり、冬季のほうが多くの収入を得ていることになる⁶³⁾。本題記の 1 月から 4 月と 9 月から 12 月の数を見ても、97 對 131 となり、極めて近似する値が導き出される。題記から導き出された傾向は、當時の状況を見事に映し出しているのである。先行研究に春が強調されるのは、遊記や碑刻、さらには地方志の風俗の項目にそういった記録が集中しているからだと思われる。

また康熙年間には捨身つまり身投げを禁じる碑刻が岱廟に立てられている。康熙 56 年の 6 月に洪水が発生したため巡禮路が通れなくなり香税が未徴収のままになっていたの、その年の 10 月に泰安州の軍糧廳が布政使の命をうけて頂上の元君廟まで徴収に行ったときのこと、10 月 10 日に山東省曹縣の李進賢という男が崖に身を投げて亡くなった。さらに 10 月 15 日には河南商丘縣の韓大小、10 月 20 日には徐州の張文舉がそれぞれ身投げして死んだのを目撃したという。張奇逢は、自分の俸祿の一部を割いて 30 丈にわたる垣根をつくり、一日に 40 文で人を雇い交替で監視させたところ、捨身を試みる者は相も変わらず多かったものの、すべて未遂で終わらせることが出来たという。ここからみても、10 月にはかなり熱狂的な參詣が行われていたことがわかる。もちろん捨身という行為は別に 10 月に限られるわけではない。しかしながら、10 月にこのような行為が頻繁に見られたと言うことは、何か特別な事情があったことを感じさせる⁶⁴⁾。

では何故、こういった記録が地方志にいっさい書かれていないのか。それは 10 月に行われる巡禮が特別な意味を持っていたからではないのか。

10 月の特殊性を解く鍵はこの月の巡禮者が特定の年に集中していることにある。そして最も集中しているのが先程述べた天啓元年と順治 17 年なのである。この 2 年間に關し

63) 『岱史』巻 13。

64) 『泰山石刻』p. 1823 にも康熙年間に河南省陳留縣から 10 月 13 日にやってきた人々の碑刻がある。

てはその年の題記の大半が10月のものである。10月という日付が書かれた題記のなかで、
 兩年が占める比率は三〜四割程度ではあるが、天啓元年に10月が多かったということは、
 決して偶然ではないだろう。

では天啓元年の10月に何故熱狂的な参詣が実施されたのか。實録を初めとする諸史料にはそれに對して明確な答えを與えているものはない。10月になにか象徴性があるとすれば、それは10月18日に羅祖が修行して成道した、ということである⁶⁵⁾。羅教の流れをくむ聞香教徒らにとって、この時期が神聖な日として重視された可能性は充分にある。そして、もしも彼らがそのような秘密結社に屬していたり、あるいはその影響を強く受けていたりしたとしたら、あえて10月に進香するという選択肢があってもおかしくない。

天啓元年の10月には、おそらく題記を残さなかった人も含めて、相當数の人々がこの時期に靈巖寺に参集したことになる。この時期に泰山周邊に民衆が大集結したことが、翌年に蜂起を行うための重要な契機となったのではなかろうか。聖地に人々が集まること、とくに何かの儀式の日に集中することは、多くの人々が合法的に情報交換する場を設けたことになるのである。

天啓年間以降に散發的に見られる10月の参詣の数は累積するとかなりの数に上るが、必ずしも毎年行われているわけではない。これは近隣の「通常の」民衆は10月にそれほど熱心に巡禮するわけではなかったことを示すのではなかろうか。

泰山の碧霞元君を信仰する人々は、確かに従來の研究の通り1月から4月にかけて熱心に参詣を行ったのである。そして秋以降に行われる参詣には、様々な教門の熱狂的信者が紛れ込むことになった。さいわい官僚が香税の徴收を行うのは4月と9月の末日である。厄介なことを避けたければ「掃殿」が終わって官僚たちが離れてしまったあとに参詣した方が良かったのかもしれない。

しかしながら、10月に多くの民が進香することを官の側ではある程度把握していたのかもしれない。香税が賑やかな巡禮が行われる春よりも、規模が小さいはずの秋冬のほうが多いという客觀的な事實は彼らも把握していたのである。不思議なことだという疑問を、遊記や何かで示していてもよいではないか。しかし文獻にはそういったことは全く書かれていない。官憲は見て見ぬふりをしたのだろうか。あるいは聞香教は生員層にも深く浸透していたから、彼らはそのような事態をあえて報告しなかったのかもしれない。こういった事實は公の記録からは黙殺されたのである。

65) このような記録は民間の經典にしばしば書かれる。例えば五部六冊の一つである『苦功悟道卷』（『寶卷初集』第一冊所收）がある。

考えてみれば、管見の限りでは 10 月前後に泰山へお参りに行ったことを記した遊記は存在していない。唯一の記録と言えるのは、先述の洪水の影響で遅れて香税を徴収することになった官僚が、熱狂的な宗教的自殺を目にしたという記録だけである。もしかすると彼らは、この時期にはあえてこういった事実から目を背けるため、泰山には行かなかったのかもしれない。そのような熱狂的な姿を見たら、彼らは対策を取らなければならなくなる。それは兩者にとって幸福なことではなかったに違いあるまい。

この突出した数字は、この時期の華北一帯に、地方志などには書き残すことができない信仰が深々と根付いていたことを示すものと言って良い。そもそも碧霞元君そのものが民間では「西牛國石氏の娘が曹仙の指を得て、天空山の碧霞宮に入った」という公の記録とは全く異なる語られ方をしていた⁶⁶⁾。このような信仰は、ある瞬間に反亂となった場合に突如として歴史上に現れる。しかし、そのような信仰は、事件として記録されなくとも、文献に残らない形、あるいは残さないという暗黙の了解のもと、民衆の日常の中で生き續けていたのである。

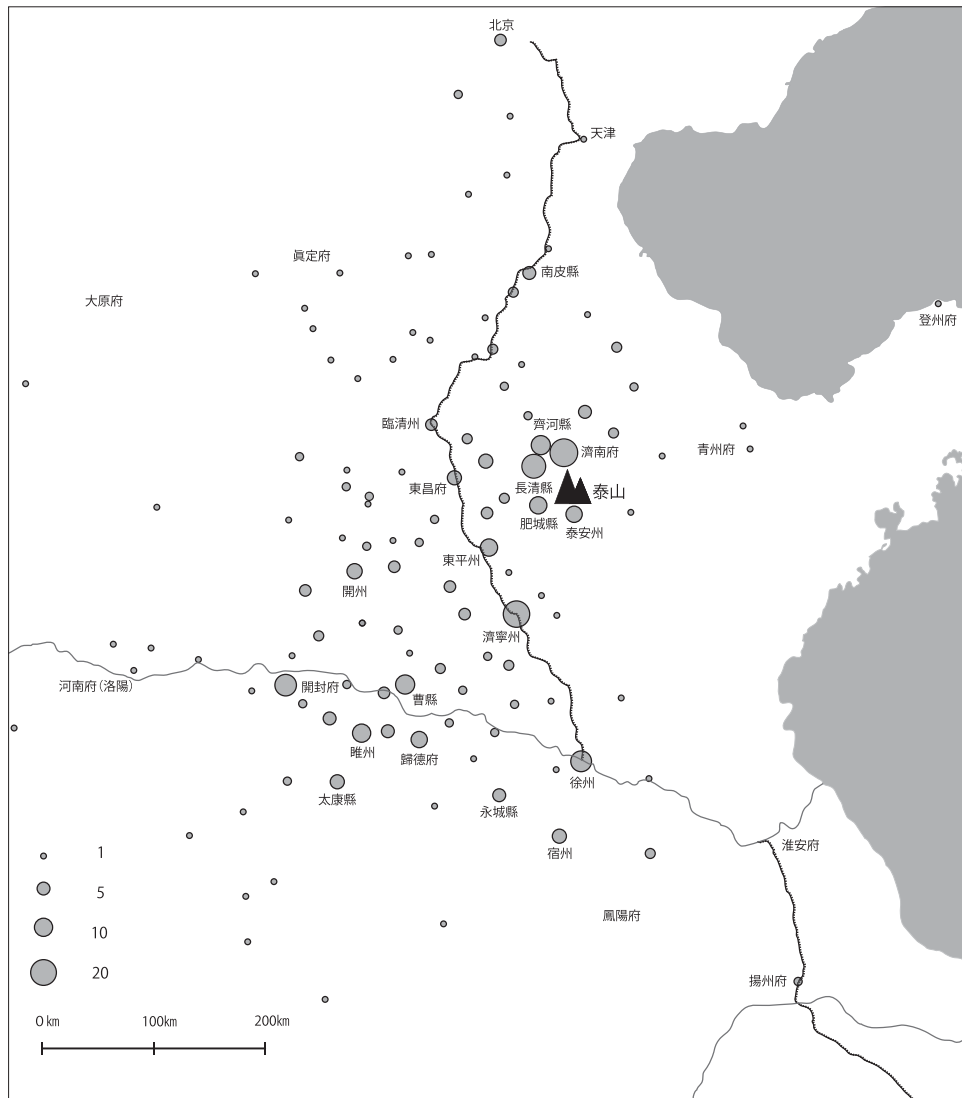
第 3 節・地域分布

次に検討するのは題記の地域分布である。本節では地域分布を明らかにするために、「冒頭」の部分の文字を分析した。ここに書かれている地名は本籍と現住地に分かれる。「徽州府歙縣人氏見在臨清州居住施財信士」[310] は最もわかりやすい例であろう。「徽州府歙縣」に本籍を持ち臨清州に寓居している人々が寄進を行ったことを示しているのである。「兗州府曹州曹縣人氏見在城内外居住」[15] とは曹縣に籍を持つ人々が曹縣の縣城付近に居住していることを示す。「河間府任丘縣人氏」[46] や「兗州府東阿陽谷二縣進香」[51] といった言葉しか書かれていない場合もあるが、これは居住地を指していると思なした。また「山東濟南府歷城齊河二縣丘家岸地方居住」[67] は、「丘家岸」が齊河縣の縣城から東北の黄河沿いにある丘家岸集のことであるため、「山東濟南府歷城齊河二縣人氏現在丘家岸地方居住」という意味であると考え、もともと歷城縣と齊河縣に住んでいた人々が齊河縣の丘家岸に移住して、そこから巡禮を行ったと思なした。「大明國山東兗州東昌二府在平縣城東二十里鋪迤前居住」[199] にも現在・見在という言葉は書かれていないが、二十里鋪は兗州府と東昌府の境界付近にあるわけではなく、明らかに在平縣の地名であるので「大明國山東兗州東昌二府人氏現在在平縣城東二十里鋪迤前居住」と読み替えた。つまり兗州・東昌の二府に本籍を有する人々が、何らかの理由で二

66) 王思任『文飯小品』卷 4「觀泰山記」。

十里舗に移り住んでいたと考えたのである。このようにして彼らの住所を特定し、一枚の主題圖を作成して、その縣ごとの分布を見ることにした [地圖]。なお、府レベルまでしか分からない場合は、暫定的に府城の所在地に算入している。また居住地が複数の行政区劃に跨る場合は、その兩方に印を付けた。丸の大きさは題記の數を示しており、題記の數に圓の面積が比例するようにしている。表現形式に改善の餘地はあるかもしれないが、地理的分布の概要を捉えることは可能であろう。

この地圖を見れば分かるように、泰山のお膝元である山東省に集中しているのが一目



[地圖] 靈巖寺題名から見た出身地の分布

瞭然である。実際に数えると山東地方からの會は半数を超えている。全體的な傾向としては現在の行政区劃で言えば山東省の西部と河南省の東部がとりわけ多く、河北省南部、江蘇省・安徽省の北部も少なくない。その他にも浙江省などの地名も見られるが、いずれも士大夫の寄進を示す題記と思われる。

この分布の特徴は多くが交通路に沿った位置に集中していることである。特に顕著なのは大運河沿いと開封府から東の黄河沿いの地域である。例えば濟寧州からの巡禮者の題記はとりわけ多い。また、上述の [310] は、歙縣の人々が臨清に住んでいるのであるから、鹽の專賣などに携わっていた典型的な徽州商人の可能性はある。一方、山東省でも泰山の東側からの巡禮者が少なかったことは對照的である。この地域は、交通も不便であったことから泰山まで行きにくく、經濟も比較的低調であった。題記の多い場所と經濟的に豊かであった地域はある程度一致するのでは無からうか。また、前節の考察とも合わせて考えると、運河沿いには漕運に携わる人々を中心に青幫などの秘密結社が結成されていたことが思い起こされる（酒井 1997）。彼らのネットワークと泰山の巡禮の關わりについては改めて考察を進めていくべきであろう。

なお『明實錄』の嘉靖 27 年（1548）の上奏には「白蓮教の餘黨は多くが山東・河南・北直隸・徐鳳之間に分かれて住んでいる⁶⁷⁾」とあり、この題記の地域分布とかなり重なっている。白蓮教をはじめとする民間宗教が盛んとされている土地では泰山への巡禮も盛んに行われていたのだ。この地理的分布は、近代における宣教師達の觀察ともかなり一致する⁶⁸⁾。また、「直隸淮安府邳州各廂社衛舍客民人等」[257] は衛籍にある人々や外地から來ていた商人がいたことを示している。淮安府という地名から考えると漕運業に携わっていた軍人が含まれていたかもしれない。

なお、地名の半数以上に「村」「庄」などの語があらわれることから、郷村に住んでいる人々がかなりの比率を占めることがわかる。このような題記の冒頭には「各庄居住」などのように會のメンバーの居住地が複数の村落にまたがることを推測させる言葉がしばしば現れる。「四散居住」という言葉はおそらくは散り散りに分かれて暮らしていると言うことであろう。例えば「直隸大名府開州長垣縣東南方四十里蘭通集四散居住各里人氏」[110] とあれば「長垣縣の東南四十里にある蘭通集にそれぞれ離れて居住している」

67) 『明實錄』世宗肅皇帝實錄卷 340 嘉靖二十七年九月乙酉。

68) 1879 年には「巡禮者は 600 里から 700 里」つまり 300 キロ以上離れたところからやってきていた (Mateer 1879a)。1920 年代半ばにも、河北省（保定・順德・大名府）や河南省（開封）江蘇省（徐州）などからやってきていたようだ (Baker 1925)。なお、1930 年代半ばに泰山を訪れた歐米人は、泰山は山東の人ばかりであったと述べている (Mullikin 1973) が、これは當時の社會狀況とも合わせて考えるべきであろう。

ことになる。蘭通集がどれほどの廣さを持つ市集かは地方志からは分からないが、平時はある程度離れた土地で生活しているのであろう。「四散」は「聚住」と對になるような言葉ではあるが、華北には散居村落はさほど多くなかったはずであるから、「様々な場所に住んでいる」「隣人ではない」ことを示すだけなのかもしれない。「保」「庄」「郷」などの言葉の使われ方は各地によって差がある（從 1995）ために當時の華北村落のいかなる状況を示しているのかは、明確なイメージを提供することが出来ないが、自然村のレベルを超えた交流は決して珍しくなかったことがわかる。このような複数の村落に跨る例は 50 を超える。

以上のように、この題記には農村の人々の名前が数多く残されているが、「城内外」居住と書かれ実際に縣城に住んでいると思われる人々も 33 例あり、あるいは關や廂など郊外に居住している場合も含めれば、その数は 50 を越える。また「山東東昌府見在本縣西關廂并各庄居住」[68] のように縣城近郊から農村に至るまで幅廣い地域の人々によって行われている結社もある。おそらく、これは 16 世紀後半以降の都市の發展により資金に餘裕の出來た人々が、たびたび泰山に巡禮していた證據ではなかろうか。明末清初における巡禮は、小農たちが結成した零細な會がなけなしの金を集めて巡禮するだけではなく、都市の裕福な人々も含めた多様なものであった。

なお彼らのように都會からやってきている會の場合は基本的に近隣の人々だけで會を作っている。「四散」「星散」なる言葉が現れることはないし、複数の都市の人々が共同で作ったと思われる會も見られない。これは都市と農村における人的結合の違いや、經濟格差を表しているのかもしれない。

第 4 節・會・社の構成

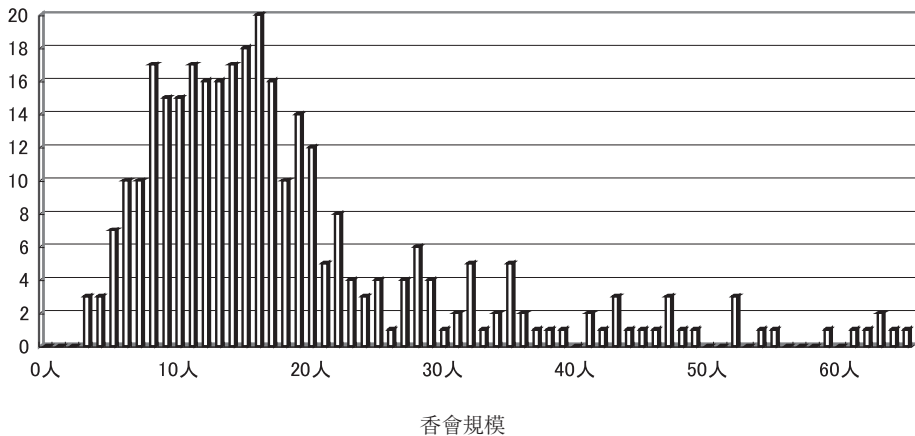
本節では個別のグループの内部構成について考察する。これまでの分析とは異なり、この問題について題記から分析できることには限界もあるだろうが、そこから抽出しえたいいくつかの情報から當時の様を垣間見てみたい。まずは一つ一つの會がおよそ何名ほどで構成されていたのか確認しよう。

（i）規模

規模については次頁のグラフに示した通りである。大小様々なグループがあり⁶⁹⁾、先述の [96-98] のように大きいものでは百人を超すが⁷⁰⁾、その半数以上が 10 人から 20 人

69) 人名が 1~3 人しか書かれていない部分はおそらく寄進者名でありグラフからは割愛している。

70) なお、様々な會が合同で立てた清末の碑刻が泰山の參道周邊に複数残る。（葉濤 2009 pp. 7



のあいだに収まる。30 人未満の會は全體の 80% 以上を占める。これは諸文獻に示される數と近い⁷¹⁾。なお武當山ではやや規模が大きく 10 人から 40 人までの團體が大半を占めている⁷²⁾。先程引用した『明實錄』の記事には白蓮教對策として 20 人以上の結社を許さないという制限が出されている⁷³⁾。この規制が出された結果として會の規模が 20 人を下回るものが多かったと考えることも出来るが、むしろ官が把握する限りでは 20 人以内が常識的な結社の規模であり、それを超えるものを規制しようという判断だったのではないだろうか。

(ii) 會首

この題記には會首、すなわち巡禮團の世話人の名前も記される。題記の書式は人名を右から左に横に連ねていくものと、右上から縦に連ねて改行してゆくものの二種類があるが、會首と明記されていない場合も基本的に一番右上に書かれた人物を會首と考えた。先行研究では會首・香頭・香首・會官・社首・大會頭・香長・首人・糾首・都管・經理・

296-305)。

- 71) 乾隆『東湖縣志』卷 5「疆域」「多至數十人」。民國『宿松縣志』卷 10「民族志」「或數十人爲一組」など、數十人という數はしばしば地方志に確認される。清末の平原縣の泰山會は 1 つのグループにつき 10 人から 20 人、多くても 30 人ほどであり (佐々木 1992) 今回の統計結果と一致する。その一方でかなり大規模な會も存在していたようだ。『醒世姻緣傳』卷 69 では、嶧山にお参りに行くシーンで 60 人を超える人々が集まり會を結成している。「6 人から 50~100 人という規模まで」(Bergen 1888 p. 541) という記録もあり、『池北偶談』卷 26「濟寧好人」には 100 人を超える人々が結社して武當山へ巡禮した逸話が記される。
- 72) 武當山については平均 15 人 (Lagerwey 1992) ほどであり、武當山の會は 10 人から 40 人の規模が全體の 73% を占めていたという (梅莉 2007)。
- 73) 『明實錄』世宗肅皇帝實錄卷 340 嘉靖二十七年九月乙酉。

會末など様々な名称を紹介する（葉濤 2009 pp. 243-244）。本題記では大多数が會首という呼稱であるが、そのほか香頭・香長・社首・糾首・駕首の5種類の名稱も確認できた。村の行政を執り行う顔役も會首と呼ばれることがあるが（旗田 1985）、この題記に現れる會首が地元に歸った後、どのような役割を果たしていたのかは定かではない。

また、會首のほかに「信官」[69-71] [117-118]「生員」[351]や「庠生」[170]といった肩書きがしばしば人名の上に注記される。このような人々は地域社會の中核を擔っていたはずである。乾隆年間以前の汭水縣では人々がお参りなどを行う際に一村で連合して一社となり、生員・監生や殷戸を推舉して會首として錢粟を集め、はるばる天壇・嵩嶽・武當の諸山に送りこむことさえあったという⁷⁴⁾。しかし、靈巖寺の題記ではこのような人々が會首を務めるのはわずか一例だけ、[112]で生員が會首を務めているときに限られ、その他の場合は別の人間が會首を務めている。おそらくは徳望・輩行・年齢など考慮すべきことは多岐にわたったのであろう⁷⁵⁾。

また、會の中には會首とは別に様々な役職があった⁷⁶⁾が、今回の題記で確認できるのは收頭 [150-152] [187-190]、社頭 [203-204]のみである。收頭は資金を徴収する會計係であろうか。いずれにせよ役職名があまり現れていないと言うことは、17世紀の段階で會の構成はさほど複雑ではなかったのではなかろうか。

なお、前節で見た吳珮のように、同名の會首が複数回現れることがある。その数は合計9名である⁷⁷⁾。いずれの會にも共通することは、同じ地域から來ていること、何人かは會首以外にも同一人物がいること、とくに2回目以降の會の2~3番目に、1回目の會に参加していた人の名前が現れることが多いことである。ここから考えると、おそらく題記の名前の並びにも何らかの意味がありそうだが、年齢順ではなさそうだ。なぜなら、1回目と2回目で順序が入れ替わっている人名があるからだ。他に注目されるのは、同一の會首が率いている會は必ず同じ土地から來ていると言うことである。つまり、會首は各地を股に掛けて活動しているのではなく、活動範圍が一定區域に限られる。地域に密

74) 乾隆『汭水縣志』卷13「風俗」。

尤好賽廟，祈神，禮佛，修醮，一村聯爲一社，推生監殷戸爲會首，斂聚錢粟，或遠送天壇，嵩嶽，武當諸山，三春無虛日。

75) 近年の山東省では、會首の選定にはは特定の決まりがあるわけではなく、宗教的儀禮に長けた人々が擔當するようだ（葉濤 2009 pp. 243-246）。

76) 先行研究では「副會首，領會香頭，都管，司房，管事，响手，吹師，運香，坦齋」などの名前が擧げられている（葉濤 2009 pp. 247-252）。

77) 周全 [383] [396]・李有全 [344] [378]・劉三恕 [136] [269]・來思溫 [212] [334]・曹三善 [158] [254]・蕭得貴 [142] [201]・吳珮 [170] [225]・鄭自安 [77] [220] [243]・劉應登 [132] [204]の9名がそれにあたる。

着していると言っても良いかもしれない。日本の御師のように聖地から派遣されて各地で參詣者を集めるような行爲は少なくともここからは確認できない。金銭を預けるのであるから、餘所者では信頼されなかった可能性もある。あくまでも巡禮を組織するのは地域社會であって、彼らは自分たちの持っているネットワークを利用して泰山に詣でたのであろう。

また、多くの會首たちによって合同で題記が彫られているものが複数見られることから、會首の間で横の繋がりが出来上がっていた可能性もある。前節で複数の村落に跨る會が複数有ることを紹介した。中には「長清齊河二縣張村店河西兩岸各里不全鄉居住」[131] のように二つの縣に跨る村落から人々が集まっていることもある。この [131] のケースではかなり居住地が近接しているようだが、[90-92] には「泰安州各保不同人氏」「肥城縣安寧陸房二社人」「肥城縣界首舖」という複数の地名が一つの縁取りの中に書かれている。肥城縣は泰安州の西南に隣接するが、安寧社・陸房社は肥城縣の縣城から 50 里ほど南に離れており、日常の生活圏はとても一致しそうにない。また、[320] は「河南山東各府州縣里都鄉保不同人氏見在曹考二縣地方星散居住」とあるので、河南・山東の幅廣い地域を本籍にもつ人々が、山東省の曹縣と河南省の考城縣に跨って居住しており、張應芳をはじめとする複数の會首に率いられて靈巖寺に來たことを示している。この題記は破損しているため、全體の規模や年代は定かではないが、比較的に整った字體から見ておそらく明代に書かれたものであろう。「曹縣會首」が一番下の段に申し譯なさに書かれていることから考えると、考城縣の人々が中心であったようだ。考城縣は境域の中を黄河が流れており、曹縣はそれを渡った北側になる。これだけの人々が、黄河を越えて結ばれていたことは大變興味深い。會首は、おそらくはこれだけの地域に分かれて暮らしている人々がともに行動を起こすための媒體の役割を果たしていた。會首たちが日常から會員や他の會首たちと交流を持っていたのかは、興味深い問題である。

なお、いくつかの特定の地域からの團體がとりわけ多いような感觸を得ている⁷⁸⁾。例えば龍塘崗という一つの市集の名は 4 つの題記に確認できる。いずれも別々の會首によって率いられているが、これはその地域に代々會の經驗や人脈が蓄積された結果、盛んに特定の寺廟に巡禮するようになったことを表すのではないか。

(iii) 女性

靈巖寺の題記には多数の女性の名前があらわれる。前近代の中國において文獻上に女

78) [50-51] と [57-59] のように同じ地域から同時期（康熙 2 年 3 月）にやってきている會がある。他にも龍塘崗という河南省歸德府睢州の地名が頻出する。龍塘崗は地方志の記載から「集」であることがわかる。

長清縣土門店善人	劉世榮單氏
杭門楊氏	劉門王氏
張進祿程氏	康門郝氏
孟門杭氏	董門賈氏
戴氏	邊守才母康氏
劉門陳氏	
張門趙氏	

題記 [345]

性の名前が残ることは少ない。通常は出身の家の姓をもって「～氏」と書かれたり、嫁ぎ先の姓と實家の姓をあわせて「張李氏」や「張門李氏」などと書かれたりすることが多い。また男性の名前が書かれたその下もしくは横に、「妻某」「母某」などの形で女性の名前が書かれることもある。家族で参詣にやってきた際に残された題記にはとくにこのような形が多い。

靈巖寺の題記にも同じような形式が多々見られるが、その中でも獨特の書き方をしているものがある。それは、男性の名前の下に續けて「～氏」と書くものである。これは「男性＋妻某」と同じように一名の男性が妻とともに参詣にやってきて名を残したとみなすこともできるかもしれない。しかしながら、女性が一人だけでやってきたのだが、碑に刻む際にその夫の名前も記したと考えることはできないか。具體例として左の題記 [345] を見てみたい。

ここに書かれた人名をどのように読み解くべきであろうか。まずは會首と思わしき「劉世榮單氏」と言う名が一番右側に書かれている。これを劉世榮と妻の單氏と讀むか、劉世榮の妻である單氏と讀むかで、イメージが全く異なってくる。「杭門楊氏」は杭姓の家に嫁いだ楊氏、「劉門王氏 戴氏」は劉姓の家に嫁いだ王氏と戴氏と考えればよいのだろう。假に「劉世榮單氏」を2名だと考えれば、14人の會の中にその夫が3人付き添っている會ということになる。もしも一名だとすると、11名の女性だけの會ということになる。この場合『醒世姻緣傳』で見られるような女性の會首によって率いられた女性だけの會が想起されよう⁷⁹⁾。「劉世榮單氏」は、劉世榮と單氏が同じ大ききで書かれており、小さく添えられているわけではない。また「張進祿程氏」は「杭門楊氏」とほぼ同じ縦のスペースを取っている。同じ大ききのスペースには一人の名前しか書いていないと見るのが妥當ではなかろうか。「邊守才母康氏」についても同様である。なお、[293]の2行目には「張應尙同母李氏」とあるが、7行目には「張應科母周氏」とある。つまり前者にだけ「同」の文字が記されている。前者は二人、後者は周氏だけということなのではなかろうか。

では、假に夫や息子の名前を自分の名前の前に書いているとすると、一部の女性だけ夫のフルネームを書き、一部は姓だけとなっているのは、如何なる理由によるのであろうか。あるいは正妻の場合は夫や息子のフルネームを書き、妾の場合は夫や息子の姓だ

79) 『醒世姻緣傳』卷69。

けを書いているのかもしれない。些細な表現の違いではあるが、女性の地位や生き方を知る上でも興味深いところである⁸⁰⁾。題記全體を通してみると「某門某氏」と書かれた女性の数が大半を占める。先述の推測が正しければ、正妻はあまり巡禮には出なかったことになる。地位の低い女性だけが會に参加して巡禮することが多かったのかもしれない。あるいは、ここから複数の妻を娶ることができる裕福な層を推定することが出来るかもしれない⁸¹⁾。似たような例である [176] も見てみよう。

萬曆四十六年五月仲夏吉旦立		泰安州南關金橋各街居住奉佛施財信士	
□得郎	呂氏	陳門高氏	
劉興	王氏	程門劉氏	
尙門	劉氏	劉應兆王氏	
孔門	鄭氏	劉應選蘇氏	
孔貞	丁氏	田友邵氏	
呂子湖	張氏	朱可敬宋氏	
宋門王	氏	黃門羅氏	
李應龍	石氏	許門苗氏	
劉簡	劉氏	馮門祿氏	
賀思魯	劉氏	張門李氏	
朱門王	氏	黃門李氏	
李子齊	周氏	賈門□□	
		紫門□□	

靈巖寺題記 [176]

この題記も「某門某氏」と「男性名 + 某氏」の占めるスペースが同じである。同じ假定をあてはめるとここに書かれているのは 25 人の女性の名前ということになる。[211] の會首の所には「徐門賈氏 潘子成陳氏 男潘京王氏」と書かれている。これは徐家の妾である賈氏、潘子成の正妻である陳氏、潘子成の息子である潘京の妻王氏の三人の女性が組織した會であったと見ることができよう。

なお、全體でみると女性の数は 850 名程度に止まる。名前が判讀できないため、性別が判然としない部分もあるから、もう少し人数は増えるだろうが、それでも全體の一割強でしかない。現在の泰山巡禮は女性が大半を占めている（葉濤 2009 p.91）が、今回の題記のデータはそれと必ずしも一致しない。[211] のように農村の女性が會首となって、

80) なお、葉濤氏は現在の巡禮では同行していないにもかかわらず扁額に名前を残している人物がいることを指摘する（葉濤 2009 p.165）。顧頡剛も、天津では妙峰山巡禮の際に代參を依頼することがあったと述べる（顧頡剛 1988）。この題記の中にも代參を頼んでいた者がいたかもしれない。

81) 例えば、『泰山石刻』で紹介されている乾隆 27 年に立てられた靈應宮の碑は 4 人の會首すべてが女性である。

大勢の女性を率いる例もあったことから、かなり多くの女性が泰山巡禮を行っていたことは間違いないし、実際には来ていたのに題記を残さなかった可能性も否定できない。『醒世姻縁傳』では正妻ならいざ知らず、妾などでは家の金を自由に扱うことも出来ないで、秘密裏にお布施をする。そのような場合は帳簿などに名前を残すことができないので大半が道婆の懷に入ってしまうと描寫している⁸²⁾。題記のこのような残り方は女性で置かれた状況を表しているのかもしれない。

第5節 巡禮者の行動

題記では彼らが靈巖寺で何を行ったのかについても言及されることがある。最後にこれらの中でも特徴的な表現を取り上げ、それが何を意味するのかを考察してみたい。

冒頭には居住地が書かれた後に「奉佛進香（佛を奉じて進香する）」と記されるものがあり、この「佛」は必ず改行した上で擡頭される⁸³⁾。それに引き續いて「建醮」「修醮」、つまり祭壇などをしつらえて宗教儀禮を行うと書かれることが多い。寺志にも僧に食事を施したり醮を行ったりする巡禮者が雲集すると記される⁸⁴⁾。具體的な祈願の内容を明記している題記もある。[144]は山東東昌府聊城縣の人である郭門李氏と息子の郭一蘭と妻陳氏の名前が記され、彼女たちが跡繼ぎに恵まれなかったので碧霞元君の御前で男の子を授かるように祈ったところ、無事に子供が生まれたため、その御禮に僧帽一百と鞋一百足を奉納し、僧侶達に布施を行ったことを記す⁸⁵⁾。このような神に願を掛ける際に誓いを立てることを「許願」と言い、それが叶った暁にお禮参りを行うことを「還願」と言った。男の子を授けることは、眼病を治癒することと並んで碧霞元君の御利益の中でも最も重要なものであり、おそらくは、同様に跡繼ぎを祈願した巡禮者は絶えなかったであろう。

一部の題記の上部には「建醮三次」[69]「二次進香」[126]と書かれている。これは、彼らが複数回泰山に巡禮したことを示しているとみて間違いない。泰山に限らずある聖

82) 『醒世姻縁傳』卷69。

83) 靈巖寺以外の泰山周邊の碑刻は、冒頭に「奉道進香」と書かれ「道」が擡頭されることが多い。さほど例は多くないが「神」「山」といった文字にも敬意が拂われ、擡頭がなされていることもある。

84) 『靈巖志』卷2。

85) 山東東昌府聊城縣六里八甲人氏見在李大夫營居住奉佛還願保安。信女郭門李氏，同男郭一蘭，男婦陳氏，因爲乏嗣，今於聖母位前祈禱一子，以得平安，無伸可報。今發虔心，不昧前願，施捨僧帽一百頂并鞋一百雙，敬詣靈巖寺鐘樓雲房，散施僧衆。祈保兒男，長命百歲，永受安泰。萬曆四十三年四月日立。

地に三年連續でお参りすることはしばしば行われ、途中で止めると不利益があると信じられていた⁸⁶⁾。

では「二山進香」「三山進香」などといった言葉はどう解釋すべきであろうか。葉濤氏は、泰山・武當山・普陀山という三つの山を參詣することではないかという自身の意見と、連續で三年巡禮したことを表すのではないかという異論を並記している（葉濤 2007 p. 95）。「朝三山修醮」[359] という言葉も現れることから考えると、「三山」が三つの山である可能性は高い。また、明末に泰山・武當山・普陀山の三山は極めて多くの巡禮者を集めたことは間違いなく、山東・河南からこれらの聖地に行く人々は確かに多かった。大變に興味深い指摘であると言えよう。

しかし、實際に一つの會がこれらの山をすべて巡ったという記録はないので、現時點で僅か數文字の言葉から判斷することは避けた。また、この「二山進香」「三山進香」という言葉が現れるのは萬曆 47 年（1619）の題記 [211] を除けばすべて清代のもので、とくに順治 14 年（1657）から 18 年（1661）の題記がその大半を占める。清朝はこの時期にはまだ沿海地域を完全には押さえていなかった。普陀山に行くことは難しかったはずである。さらに言えば、こういった言葉が書かれるのは山東省のものばかりである。以上のことから考えると、これは明末清初の一定の時期に山東で盛んに行われた巡禮の形を示しているのかもしれない。

結 語

本稿では靈巖寺の題記の分析から 17 世紀における泰山巡禮の状況を論じてきた。數量的な分析と具體例の考察を進めた結果、先行研究では言及されていなかった様々な事実が明らかになった。

題記の減少する時期が戦亂や自然災害の時期と重なることはある程度は想像できていたが、徐鴻儒の反亂前に急激に増加することは、全く思いもよらぬことであった。泰山の巡禮と羅教・聞香教をはじめとする民間宗教結社の影響を受けた人々が関係していた可能性は極めて高い。そして、順治年間には狭い隙間を縫うように題記が残されていたにも関わらず、康熙年間から急速に数が減り始めたことと、こういった宗教結社の趨勢は関わりがあるのかもしれない。10 月に巡禮が大變多かったことなども同じ文脈から判

86) こういったお参りの風俗は（山曼 2001 pp.6-7）が明らかにする。『泰山石刻』p.626 にもいくつか事例が載る。なお武當山にも巡禮の回数を示した碑文がある。（梅莉 2007 p.221, pp.226-227）。

斷することができよう。題記の量や香税の額から判断すると、泰山巡禮は、地方志などが伝える春の祭りとは大きく異なる側面を有していたのである。このような文物と典籍の齟齬は、典籍史料の紋切り型の記述を盲信してはならないという教訓ともなる。

地域分布は現在の行政区劃で言えば河北省南部・山東省西部・河南省東部・江蘇省北部が大半を占める。つまり、運河沿いを中心とする地域に集中している。これは交通の便が良かったからだけでなく、商業が活発であり、移住してくる人の数も多かったことが、結果として巡禮者の数を大幅に増やす結果になった可能性もある。水路沿いに多いことから考えると、青幫などの影響も無視できないだろう。

會の内部構成については、従來の知見を大幅に改めることはなかったが、規模や女性の比率などを具体的な数字をもって示すことができたことは今後の研究の基礎となるであろう。會首と呼ばれる人々が活用していたであろう泰山の廟や周囲の都市や村落との繋がりも今後解明が待たれる。

本稿を終えるに当たって今後の課題を三つほど提示しておきたい。一つ目は泰山全體の碑刻との比較である。本稿では考察対象を靈巖寺の題記に限定した。それは量があまりにも膨大であるため、限られた時間では泰山とその周辺に残る碑刻を全て扱うことができなかったからである。本稿で扱った17世紀以前の題記・碑刻については、泰山周辺に少なくとも二種類がまとまった形で残されている。これらを考察することによってデータをより精緻なものにしたい。また、靈巖寺以外の泰山周辺の題記・碑刻はほとんどが18世紀以降のものである。17世紀とそれ以降にはどのような違いがあるのか、本格的に調べていく必要があるだろう。

二つ目は中國の他の聖地との比較である。湖北省の武當山や北京近郊の妙峰山、さらには北京市街地にある東嶽廟にも同様の碑刻があり、すでに研究が行われているが、今回示したような分析は行われていない。これらのデータを本稿と同じような視点から分析した場合に、どのような結果が出るだろうか。普陀山や峨眉山に少数ながら残されている題記も考察対象としたい。

三つ目は題記の公開である。本稿では紙幅に限りもあるので題記の一覧表だけを提示し、人名などの大半を割愛した。しかしこのような素晴らしい史料を筆者一人だけで読むのは残念でならない。個別の事例を地方志などと付き合わせて検討すれば一層興味深い事例が明らかになるのではないかと。改めて、何らかの機会にすべての録文を紹介する機会があれば幸いである。

【附記】 本稿は 2010 年度明清史夏合宿の會で行なった口頭報告の際に諸先生方から賜った御意見、御質問に多くの示唆を得た。心より感謝申し上げたい。

【参 考 文 献】

(和文)

- 浅井紀 1990 『明清時代民間宗教結社の研究』, 研文出版。
- 石野一晴 2010 「泰山娘娘の登場——碧霞元君信仰の源流と明代における展開」, 『史林』, 第 93 卷 4 號。
- 太田出・佐藤仁史(編) 2007 『太湖流域社會の歴史學的研究——地方文獻と現地調査からのアプローチ』, 汲古書院。
- 奥村義信 1982 『滿洲娘考』, 第一書房。
- 小田則子 1995 「清代の華北農村における青苗會について——嘉慶年間以降の順天府寶坻縣の事例より」, 『史林』第 78 卷 1 號, pp. 88-96。
- 酒井忠夫 1997 『中國幫會史の研究(青幫篇)』, 國書刊行會。
- 佐々木衛(編) 1992 『近代中國の社會と民衆文化——日中共同研究・華北農村社會調査資料集』, 東方書店。
- 澤田瑞穂・窪德忠 1982 『中國の泰山』, 講談社。
- 澤田瑞穂 1982 『中國の民間信仰』, 工作舎。
- 澁谷裕子 1990 「明清時代, 徽州江南農村社會における祭祀組織について——『祝聖會簿』の紹介(1)」, 『史學』59-1, pp. 103-134。
- 橘樸 1936 『支那思想研究』, 日本評論社。
- 中國農村慣行調査刊行會(編) 1952 『中國農村慣行調査』第 1 卷-第 6 卷, 岩波書店。
- 旗田巍 1986 「廟の祭禮を中心とする華北村落の會——河北省順義縣沙井村の辨五會」, 小林弘二編『舊中國農村再考——變革の起點を問う』アジア經濟研究所, 1986 年。
- 福武直 1951 『中國農村社會の構造(増補版)』, 有斐閣。

(中文)

- 陳寶良 1996 『中國的社與會』, 浙江人民出版社。
- 陳寶良 2004 『明代社會生活史』, 中國社會科學出版社。
- 從翰香(主編) 1995 『近代冀魯豫鄉村』, 中國社會科學出版社。
- 顧頡剛(編著) 1988 『妙峰山』, 上海文藝出版社。
- 國家文物局(主編) 2007 『中國文物地圖集(山東分冊)』, 中國地圖出版社。
- 劉慧・陶莉 2004 「關於宋代的泰山香會」『民俗研究』, 2004 年第 1 期, pp. 120-128。
- 梅莉 2007 『明清時期武當山朝山進香研究』, 華中師範大學出版社。
- 前南京國民政府司法行政部(編) 2000 『民事習慣調查報告錄』, 中國政法大學出版社。
- 邱仲麟 2000 「耆年冠帶——關於明代「壽官」的考察」『臺大歷史學報』26, pp. 207-262。
- 山曼(主編) 2001 『泰山風俗』, 濟南出版社。
- 泰安市文物局(編) 1993 『泰山石刻大全』, 齊魯書社。
- 王宗培 1931 『中國之合會』, 中國合作學社。

- 吳廷文・蕭寶方 1989 「張大山香客店」『民俗研究』, 1989 年第 4 期。
- 楊西孟 1935 『中國合會之研究』, 商務印書館。
- 葉濤 2004a 『泰山香社研究』, 北京師範大學博士論文。
- 葉濤 2004b 「泰山後石塢元君廟與鄒城西關泰山香社——當代民間信仰組織的個案調查」『民間文化論壇』, 2004 年第 3 期, pp. 6-12。
- 葉濤 2009 『泰山香社研究』, 上海古籍出版社。
- 袁明英(主編) 2007 『泰山石刻』, 中華書局。
- 周郢(校證) 2006 『泰山志校證』, 黃山書社。

(歐文)

- Chavannes, Edouard. 1910 *Le T'ai Chan : Essai de monographie d'un culte Chinois*, Paris (菊地章太(譯) 2001 『泰山——中國人の信仰』, 勉誠出版)。
- Duara, Prasenjit. 1988, *Culture, Power, and the State : Rural North China, 1900-1942*, Stanford : Stanford University Press.
- Baker, Dwight Condo. 1925 *T'ai Shan : An Account of the Sacred Eastern Peak of China*. Shanghai : Commercial Press.
- Bergen, Paul. D. 1888 "A Visit to T'ai Shan" *Chinese Recorder and Missionary Journal* 19, no. 12 pp. 541-546.
- Dott, Brian Russell. 2004 *Identity Reflections : Pilgrimages to Mount Tai in Late Imperial China*, Cambridge and London : Harvard University Asia Center.
- Lagerwey, John. 1992. "The Pilgrimage to Wu-tang Shan." In *Pilgrims and Sacred Sites in China*, ed. Susan Naquin and Chün-fang Yü, pp. 293-332. Berkeley : University of California Press.
- Pomeranz, Kenneth. 1997 "Power, Gender, and Pluralism in the Cult of the Goddess of Taishan" Theodore Hutters, R. Bin Wong, and Pauline Yu eds. *Culture and State in Chinese History*, Stanford : Stanford University Press, pp. 182-204.
- Mateer, Calvin Wilson 1879a "T'ai san : Its Temples and Worship." *Chinese Recorder and Missionary Journal* 10, no. 5 pp. 361-369.
- Mateer, Calvin Wilson 1879b "T'ai san : Its Temples and Worship." *Chinese Recorder and Missionary Journal* 10, no. 6 pp. 403-415.
- Mullikin, Mary Augusta. 1945 "Tai Shan : Sacred Mountain of the East", *National Geographic Magazine*, 87, pp. 699-718.
- Mullikin, Mary Augusta, and Anna M. Hotchkis. 1973 *The Nine Sacred Mountains of China : An Illustrated Record of Pilgrimages Made in the Years 1935-1936*. Hong Kong : Vetch and Lee Ltd.
- Naquin, Susan, and Chün-fang Yü eds. 1992 *Pilgrims and Sacred Sites in China*, Berkeley : University of California Press.
- Tung, Fu-ming. 1939 "Chinese Itinerant Players at Miao Feng Shan, Evidences of Greek Influence in the Pilgrimage Plays at the Temple of the Jade Lady." *Collectanea Commissionis Synodalis Peking* 12, pp. 20-43.
- Zhang, Zeyu. 1991 "An Open City at the Foot of Mt. Tai." *Beijing Review*, 34, pp. 15-19.

【靈巖寺大雄寶殿題記一覽表凡例】

1. 判讀できない文字は□を挿入している。文字が讀み取れない範囲が広い場合は周囲の文字の大きさから文字数を推測した。また斜體になっている数値は推定値であることを示す。なお、異體字については基本的に正字に變換しているが、歴城縣を曆成縣と書くといった誤字についてはそのまま残している。
2. 「No(1)」は通し番号を表す。本文で引用する際にはこの番号を記した。
3. 「文様」は題記の周囲が文様で裝飾されているかどうかを示す。○ = 文様有り、△ = 線で圍っている、× = 何もない、を示し、記號が複數書かれている場合は、左側が外側の文様で、右側が内側の文様を示す。例えば [43] に○△とあるが、これはこの題記が彫られている石全體が文様で圍われ、その中にさらに線で圍った題記ということを示す。同時に物理的な破損のある場合には◆、文字の判讀に困難を生じるほど激しい汚れについては▼をその右側に付した。
4. 「No(2)」は「No(1)」とは異なる基準で題記に番号を與えた。左側のアルファベットと二桁の數字は各石板に與えた番号。E = 東側、N = 北側、W = 西側の壁に填め込まれている事を示す。ハイフンの右側の數字はその石板の右から何番目に彫られているかを示す。0 はその石板に書かれた唯一の文字であることを意味している。
5. 「年號」は題記に書かれた年代。干支で書かれたものは改めている。
6. 「西曆」は題記に書かれた年號を西曆に換算したもの。なお、舊曆では天啓2年の十二月朔日が西曆 1623 年の元日にあたるように、年末については西曆では翌年になる場合もあるが、今回はそれを無視して天啓2年であれば 1622 年のように單純に換算した。
7. 「日付」は題記に書かれた日付を4桁の數字で表したもの。0101 は1月1日。1015 は10月15日を表す。閏月の場合は、30を足して處理した(閏二月二十日→0250)。月のみ書かれる場合は下二桁を00とした。同じく日付だけわかる場合は上二桁を00とする(十二日→0012)。
8. 「冒頭」には題記の一番右側からはじまる文言をそのまま記した。主に地名が書かれる。
9. 「末尾」には題記の最後の部分に書かれている文字をそのまま記した。主に日付が書かれる。
10. 「上部」には題記の上部に書かれている文字をそのまま記した。右から左へ向かって書かれることが多い。
11. 「省」・「府」・「州」・「縣」は現在の行政区劃ではなく『明史』地理志の區劃によって分類した。例えば清初に置かれた江南省は、ひとまず南直隸と入力した。いずれも冒頭の二文字だけを入力している。
12. 「會首氏名」は會首あるいは會首と推定される人物の氏名を記した。

13. 「總人數」は題記に刻まれた人間の總計を示す。文字が読みとれないなどの理由で推定不可能な場合には？を記入し，詩文などのように巡禮者の名前が書かれていない場合は×と記した。
14. 「女性」は人名から明らかに女性と判断できる人物の數。

No(1)	文様	No(2)	年號	西曆	日付	冒頭
1	×◆	E01-0	萬曆 35 年	1607	1004	河間府滄州南皮縣東北白塔寺劉家住
2	○	E02-1	萬曆 35 年	1607		白衣院施財信僧會首
3	○	E02-2	順治 18 年	1661	0928	直隸徐州城南鼎山地方居住
4	○	E02-3	萬曆 35 年	1607	0315	敕賜護國靈巖禪寺焚修住持率領合山僧衆助工折殿題名記
5	○	E03-1	萬曆 35 年	1607		濟南府青城縣
6	○	E03-2	萬曆 35 年	1607		曲德鎮
7	○	E03-3	萬曆 35 年	1607		東光縣
8	○	E03-4	萬曆 35 年	1607		本府各州縣人氏見本寺經營施財善人
9	△▼	E04-1	萬曆 38 年	1610		濟南府濟陽縣施財善人王汝□□氏
10	△▼	E04-2	萬曆 38 年	1610	0015	濟南府肥城縣安寧社會首王進龍等同登靈巖進香刻名永垂不朽
11	○	E05-0	萬曆 35 年	1607	0115	靈巖寺重修大佛殿募緣疏
12	○	E06-1				青城縣
13	○	E06-2	順治 17 年	1660	1019	兗州府東平州城東營子村居住
14	○	E06-3				經歷何獻禎 庠生張馨
15	○	E06-4	順治 18 年	1661	0909	山東兗州府曹州曹縣人氏見在城內外居住
16	×	E07-0	崇禎 4 年	1631	冬日	『靈岩寄詠』『題朗公峰』
17	○	E08-1				濟南府長清縣將軍廟
18	○	E08-2				濟南府章丘縣水寨鎮
19	○	E08-3				徐州關廟各街居住
20	○	E08-4	萬曆 40 年	1612	1027	直隸河間府滄州在城一會
21	△◆	E09-0	順治 15 年	1658	0215	山東濟南府濟陽縣□□□各里不同王□□庄居住
22	×	E10-0				(文字確認できず)
23	△	E11-1	順治 18 年	1661	0909	兗州府曹州曹縣人氏見在城內外居住
24	△	E11-2	順治 17 年	1660	1016	山東東昌府荏平縣城北十八里桑家坊居住奉佛進香會首張培生等
25	×	E12-1	康熙 4 年	1665	0900	河南歸德府商丘縣人氏見在城內外居住
26	△	E12-2	順治 18 年	1661	1012	大清國山東兗州府曹州曹縣人氏見在□□集東方四散居住奉
27	△	E13-0	順治 18 年	1661	春月	濟南府歷城西關列門居住
28	△	E14-0	順治 15 年	1658	0826	山東兗州府濟寧州南關鐵鼓廟居住
29	×	E15-1	崇禎 2 年	1629	0300	大明國山東濟南府長清縣城東北王徐鋪各庄居住奉佛進香建醮題名
30	×	E15-2	崇禎 2 年	1629	0725	大明國山東兗州府漁台縣南陽鎮運河□□西岸居住奉佛修醮
31	×	E16-1	天啓 7 年	1627	0317	大明國山東濟南府齊河縣各里□□人氏見在□□三居住慈恩修醮
32	×	E16-2	天啓 7 年	1627	0313	張秋鎮穀街居住
33	×	E17-1	康熙 2 年	1663	0320	江南鳳陽府虹縣進香
34	○	E17-2	崇禎 元年	1628	1101	河南開封府扶溝縣各保不同人氏見在城二崗四散居住建醮
35	×	E17-3	康熙 3 年	1664	0800	濟寧州南城七鋪
36	×	E18-1	順治 17 年	1660	1019	大名府滑縣東南郭固大槐樹居住
37	×	E18-2	萬曆 38 年	1610		詩文
38	△	E18-3	崇禎 7 年	1634		詩文
39	△	E18-4	康熙 3 年	1664	0800	兗州府濟寧州南關
40	×	E18-5				(判讀不可)
41	○	E19-1	萬曆 39 年	1611	1000	徐州豐縣三鄉田村保人氏見在朱□村居住
42	○	E19-2	順治 18 年	1661	0927	三鄉司馬保劉庄村住
43	○△	E19-3	順治 17 年	1660	1027	山東兗州府濟寧州城西北鄉昇庄村
44	×▼	E20-1	順治 14 年	1657	0400	山東濟寧州南關居住
45	△▼	E20-2	順治 18 年	1661		歸德府商丘縣迤南
46	×	E21-1	康熙 2 年	1663	0100	直隸河間府任丘縣人氏□□□□□□□□
47	×	E21-2	崇禎 4 年	1631	0927	直隸大名府開州在城居住□□□
48	×◆	E22-0	天啓 4 年	1624	0315	兗州府濟寧州軍民人等姓名于後計開
49	×	E23-0				(文字確認できず)

殿題記一覽

末尾	上部	省	府	州	縣	會首氏名	總人數	女性	
萬曆三十五年十月初四日立石	朝山進香	北直	河間	滄州	南皮	劉東洋	28	7	
順治拾捌年玖月貳拾捌日建醮		南直		徐州		慶保	18	0	
						張秉尙	15	0	
萬曆三十五年正月十五日立石			山東	濟南		青城	蘇東齊	27	1
		山東	濟南			馬應祥丘氏	4	1	
		北直	河間	景州	東光	蔣尙忠	25	0	
		山東	濟南			律祥	23		
		山東	濟南		濟陽	王汝□□氏	45	30	
萬曆庚戌□春望日勒名		山東	濟南		肥城	王進龍	27	2	
萬曆三十五年正月十五日脩殿						×	×	×	
順治十七年十月十九日立	三山進香	山東	濟南		青城	王景賢	16	6	
		山東	兗州	東平		王者臣, 李化普	14	2	
順治十八年九月初九日立	萬古流芳	山東	兗州	曹州	曹縣	×	×	×	
						朱世詔, 韓九成	21	5	
崇禎四年冬日關中麟遊登州府司理陳尙策題						×	×	×	
萬曆四十年十月二十七日立		山東	濟南		長清	張□河	3	1	
		山東	濟南		章丘	董□珠	26	0	
		南直		徐州		戴□	11	0	
		北直	河間	滄州		孫續姐	19	1	
順治十五年二月十五日		山東	濟南		濟陽	王太師	15	0	
順治十八年九月初九日	三山進香	山東	兗州	曹州	曹縣	×	×	×	
						李道	9	0	
順治拾柒年拾月十六日立石	建醮流芳	山東	東昌		茌平	張培生	17	0	
	康熙四年菊月進香立	河南	歸德		商丘	曹□	12	0	
順治十八年十月十二日立	二山進香	山東	兗州	曹州	曹縣	黃加□	20	0	
順治十八年春月日立	三山進香	山東	濟南		歷城	花隨	22	8	
順治十五年八月二十六日立	建醮流芳	山東	兗州	濟寧		袁□美	9	0	
崇禎二年三月吉旦修醮題名立石	萬世流芳	山東	濟南		長清	高守信	11	0	
崇禎二年七月二十五日立石		山東	兗州		漁臺	趙松	12	0	
天啓七年三月十七日立		山東	濟南		齊河	王□在	29	0	
天啓七年三月十三日立		山東	兗州		東阿	崔□宇	3	0	
康熙二年三月二十日立		南直	鳳陽		虹縣	韓門張氏	15	14	
崇禎元年十一月初一日會衆同立		河南	開封		扶溝	牛□後	13	0	
康熙三年八月吉旦		山東	兗州	濟寧		陳鳴鳳	14	0	
順治十七年十月十九日		北直	大名		滑縣	丁國棟	7	0	
于萬曆庚戌歲從先君任平 持曾習靜寺中迄今已廿七						×	×	×	
崇禎甲戌						×	×	×	
康熙三年八月□日全會立	朝山進香	山東	兗州	濟寧		王瑞宇	14	0	
萬曆三十九年十月吉日立	三山進香	南直		徐州	豐縣	鄧時演	11	0	
順治拾八年九月二十七日立		南直		徐州	豐縣	孫娘	10	1	
順治十七年十月廿七日建醮		山東	兗州	濟寧		楊濟語	9	0	
順治十四年四月□□□		山東	兗州	濟寧		刘小橋	14	0	
順治十八年□□□題名		萬古流芳	河南	歸德		商丘	□春浩	6	0
康熙二年正月吉日立		流名	北直	河間		任丘	陶美□	8	0
崇禎四年九月廿七日			北直	大名	開州		安振世	20	0
天啓甲子季春望日吉旦立			山東	兗州	濟寧		劉良富	19	0
							?	?	?

17 世紀における泰山巡禮と香社・香會

No(1)	文様	No(2)	年號	西曆	日付	冒頭
50	×	E24-1	康熙 2 年	1663	0300	江南鳳陽府虹縣進香
51	×	E24-2	康熙 21 年	1682	1012	山東兗州府東阿陽谷二縣進香
52	×	E25-0	順治 17 年	1660	1022	山東東昌府平□衛聊城縣軍民人氏見在蔡馬庄四散居住
53	○	E26-1	萬曆 35 年	1607		
54	○	E26-2	萬曆 35 年	1607		東昌府城東曹官屯
55	○◆	E26-3	萬曆 35 年	1607		□□□□聊城縣
56	○◆	E26-4	萬曆 35 年	1607		歷城縣
57	×	E27-1	順治 14 年	1657	0814	大清國山東兗州府濟寧州俱在南關居住計開
58	△	E27-2	康熙 2 年	1663	0300	江南鳳陽府虹縣進香
59	△	E27-3	順治 14 年	1657	0324	大清國山東濟南府章丘□東錦州鄉地泊頭等各庄居住/曹孟庄/大康庄
60	×	E28-1	崇禎 2 年	1629	0708	大明國直隸鳳陽府宿州城西北見在黃疇橋河西居住奉
61	×	E28-2	康熙 26 年	1687		山東兗州府濟寧州道門各街居住各姓名開列於後
62	×	E29-1	崇禎 3 年	1630	0200	大明國山東兗州府東平州陽穀縣阿城各州府縣
63	×	E29-2			0114	
64	×	E29-3	崇禎 3 年	1630	1000	大明國山東兗州府單縣三月于□□人氏見在□店居住
65	×	E29-4				直隸徐州城東□□□地方四散居住□□
66	×	E30-1	天啓 4 年	1624	0110	大明國山東濟南府肥城縣門裡官外民
67	×	E30-2	崇禎 8 年	1635	0220	山東濟南府歷城齊河二縣丘家岸地方居住
68	○▼	E31-0	天啓 5 年	1625	1013	山東東昌府□□□□□□□見在本縣西關廂并各庄居住
69	×▼	E32-1	天啓 7 年	1627	1015	山東濟南府齊河縣城南曹家營居住
70	×▼	E32-2				河南歸德府考城縣城東□□□白□□寨地方居住
71	×▼	E32-3				直隸大名府清州□□□□□塔村居住
72	×	E33-0				山東濟南府儀衛□街□地方居住奉佛
73	×	E34-0	崇禎 9 年	1636	1111	山東濟南府歷城長清二縣民人店舖東北王家庄居住各庄不齊
74	×	E35-0	天啓 7 年	1627	1027	河南開封府太康縣各里人氏見在龍渠集迤西南皆村居住朝山進香修醮
75	×	E36-1	天啓 2 年	1622	0223	山東濟南府濮州觀城縣城南黃廟
76	×	E36-2		1670	0228	河□□□德府永□□□□迤西
77	×	E36-3	天啓 7 年	1627	0313	大明國山東兗州府東平州各庄村居住
78	×	E37-0	天啓 7 年	1627	0213	明國山東兗州府□□□上委社之頭村人氏
79	×	E38-0				題字【藏拙】
80	×	E39-1				題字【虛白】
81	△	E39-2	順治 17 年	1660	1021	北直隸冀定府冀州不同東□□村居住奉佛
82	×	E40-1	崇禎 元 年	1628		大明國河南開封府陳留縣人氏見在曲□□集居住奉佛進香修醮保安信士
83	×	E40-2	萬曆 42 年	1614	0300	大明國山東濟南府肥城縣在城并庄村居住佛重修齋廚施財信士
84	×	E41-1	順治 15 年	1658	0215	東昌府清平縣魏家塢
85	×	E41-2	崇禎 8 年	1635	1016	大明國山東兗州府濟衛右所千舍餘人氏見在關□郭官屯正南本庄居住
86	×	E41-3	崇禎 6 年	1633	0200	山東東昌府□□各里□人氏見在城裏北街居住奉佛朝山進香保安信士
87	×	E41-4	康熙 7 年	1668	0311	山東兗州府濟寧州南關□□□各街居住
88	×	E42-1	崇禎 4 年	1631	1106	朝山進香信人開列於後登州府
89	△	E42-2	順治 18 年	1661	1005	河南開封府祥符縣人氏見在沙李家寨週遑居住奉
90	○	E43-1	天啓 7 年	1627	0300	大明國山東濟南府泰安州各保不同人氏見在城西南□□各庄村居住奉佛□國進香建醮□□
91	○	E43-2	天啓 7 年	1627	0300	肥城縣安寧陸房二社人
92	○	E43-3	天啓 7 年	1627	0300	肥城縣界首鋪信女
93	×	E44-0	天啓 3 年	1623	0110	大明國山東濟南府肥城縣陸房社週園四散居住奉佛修因進香建醮
94	×	E45-1	萬曆 46 年	1618	0917	南瞻部洲大明國河南承宣布政使司汝寧府遂平縣羅山□各保里鄉居住不同奉佛進香掛袍申明□恩建醮奉當來十佛九逢有表申奏四十八代祖師聖前善士開列于後
95	×	E45-2	萬曆 46 年	1618	0917	汝寧府確山縣新興保城西□□石瓦店居住
96	×	E46-0	天啓 7 年	1627	0404	大明國山東濟南府歷城縣城北大柳樹村□□寺各□□居住奉佛修設酬天謝地報國佑民造聖大駕祝敬神明供佛筵僧普濟幽爽禮懺道場三晝夜衆等題名于後
97	×	E47-0	天啓 7 年	1627	0404	(題記のみ)

末尾	上部	省	府	州	縣	會首氏名	總人數	女性
康熙二年三月立	題名	南直	鳳陽		虹縣	李加仁	18	0
康熙二十一年十月十二日立	萬古流芳	山東	兗州		東阿・陽谷	趙良玉	19	0
順治十柒年拾月貳拾貳日脩醮	參山進香	山東	東昌	平山衛	聊城	徐允祿	66	18
						?	15	9
		山東	東昌			高世祿	7	0
		山東	東昌		聊城	李門徐氏	8	7
		山東	濟南		歷城	王應可	3	1
峇順治拾肆年捌月拾肆日建醮全立	題名碑	山東	兗州	濟寧		殷可亮	21	8
康熙二年三月□日立	題名	南直	鳳陽		虹縣	張一虎	9	1
順治十四年三月二十四日建醮		山東	濟南		章丘	高修	41	19
崇禎二年七月初八日立		南直	鳳陽	宿州		吳希孔	31	0
大清康熙二十六年□□□日立石	萬古流芳	山東	兗州	濟寧		張祥明	14	0
崇禎三年二月日立		山東	兗州	東平	陽谷	杜葉德	47	11
正月十四日立		山東	濟南		歷城・長清	□□□	11	0
崇禎三年十月初□日		山東	兗州		單縣	邢惠和	9	0
石匠……		南直		徐州		?	?	?
天啓四年正月初十日立		山東	濟南		肥城	張誠忠	17	0
崇禎八年二月二十日鐫石		山東	濟南		歷城・齊河	李克謙	22	0
天啓五年十月十三日全立		山東	東昌			丁尙德吳登舉等	45 +	0
天啓七年十月十五日立石題名	建醮三次	山東	濟南		齊河	彭□萬(他2名)	21	0
□□□年□□□□	朝山進香	河南	歸德		考城	姜文進, 趙全	35	0
□□□□□		北直	大名	清州		?	8	?
		山東	濟南		儀衛□	王欽	85	55
崇禎九年十一月十一日立		山東	濟南		歷城・長清	官守明	19	9
皇明天啓柒年十月二十七日立石		河南	開封		太康	晁寶	17	0
天啓二年二月廿三日立石人洪沈		山東	濟南	濮州	觀城	張應泊	13	0
康熙九年二月二十八日		河南	歸德		永城	?	?	?
天啓七年三月十三日立		山東	兗州	東平		鄭自安	39	0
天啓七年二月拾三日立		山東	兗州			□□	49	5
						×	×	×
						×	×	×
順治十七年十月二十一日立		北直	真定	冀州		趙泰	9	0
崇禎元年		河南	開封		陳留	崔吉福	32	7
萬曆四十二年三月吉旦立		山東	濟南		肥城	李守選	37	4
順治十五年二月十五日建	三山進香	山東	東昌		清平	呂登才	19	0
崇禎八年十月十六日		山東	兗州		濟衛右所	張宗順	15	0
崇禎六年二月日立石		山東	東昌			□汝泰	8	0
康熙七年三月十一	二山進香	山東	兗州	濟寧		□門張氏	16	16
崇禎四年十一月初六日全立碣	山泉雙奇	山東	登州			?	9	0
順治十八年十月初五日題名費隱	建醮流芳	河南	開封		祥符	翟光啓	19	0
峇明天啓七年歲在丁□□□		山東	濟南	泰安		高智	44	0
		山東	濟南		肥城	王乙□	14	0
		山東	濟南		肥城	胡張氏	11	11
天啓三年正月初十日立石		山東	濟南		肥城	劉彥春	102	0
		河南	汝寧		遂平	王尙□	10	6
萬曆四十六年九月十七日吉旦		河南	汝寧		確山	梁□	25	13
		山東	濟南		歷城	陳天才, 王乙才	162	17
						×	246	?

17 世紀における泰山巡禮と香社・香會

No(1)	文様	No(2)	年號	西曆	日付	冒頭
98	×	E48-0	天啓 7 年	1627	0404	
99	△▼	E49-1	順治 18 年	1661	0105	山東兗州府東昌府鄆城縣濮州東昌衛□居住
100	×	▼E49-2				山東濟南府歷城縣東關居住
101	×	▼E50-0	天啓 6 年	1626	0115	山東濟南府歷城縣…佛修醮□□□□□
102	×	E51-1	崇禎 4 年	1631	1207	直隸大名府滑縣高陽鄉泊先□□村楊家庄居住
103	×	E51-2				東昌府濮州范縣人氏見在□□□集
104	×	E51-3	康熙 6 年	1667		河南開封府□□□四散居住
105	×	E51-4	崇禎 3 年	1630	1008	大名府長垣縣□木村居住
106	△	E52-0	崇禎 2 年	1629	0909	河南□開封府封邱縣□□□集信士東□居住奉佛進香□□
107	△	E53-1	崇禎 8 年	1635	1015	大明國河南歸德府夏邑縣東關居住信士
108	△	E53-2	崇禎 8 年	1635	1015	大明國直隸大名府開州各里不同人氏見在育□寨居住保安信士
109	×	E54-1	崇禎 8 年	1635	1011	直隸大明府開州各里不同人氏見在孟庄村居住佛修醮
110	×	E54-2	康熙 27 年	1688	0111	直隸大名府開州長垣縣東南方四十里蘭通集四散居住各里人氏
111	×	E55-1	崇禎 9 年	1636	1007	山東兗州府單縣城北方貴□居住奉□佛修醮
112	×	E55-2	崇禎 8 年	1635	0115	大明國直隸眞定府趙州隆平縣見在北開庄集居住奉佛修醮會首生員
113	×	E55-3	崇禎 8 年	1635	0315	山東濟南府長清縣壩山保進南劉家庄居住奉佛修醮
114	○	E56-1	萬曆 35 年	1607		京都內府各衙門太監等官
115	○	E56-2	萬曆 39 年	1611	0817	直隸鳳陽府宿州城關廂人等
116	△	E56-3	順治 17 年	1660	1024	直隸徐州蕭縣清墟村居住
117	×	E57-0				靈巖四首
118	×	N01-1	天啓 2 年	1622	0422	泰安州南關蒿里居住奉佛進香保安
119	×	N01-2	天啓 4 年	1624	0100	山西張汝德等
120	×	N02-0	萬曆 47 年	1619	0100	河南周府長史司及開封府祥符縣人氏見在省城內外居住
121	×	◆N03-1				河南周府長史司及開封府祥符縣人氏見在省城居住
122	×	◆N03-2				大明國直隸大明府開州黃丘里黃丘村居住
123	×	◆N04-1	崇禎 元 年	1628	1013	道朝山進香
124	×	◆N04-2	萬曆 48 年	1620	0303	
125	×	N05-0	天啓 元 年	1621	1017	山東兗州府東平州梁村四散居住各社不同
126	×	N06-0	萬曆 48 年	1620	0224	直隸眞定府趙州高邑縣東馬開村居住二次進香
127	×	N07-0	天啓 元 年	1621	1023	山東兗州府城武縣城南牛孟村居住奉
128	×	N08-1	天啓 元 年	1621	1015	河南周府開封府祥符縣民具在省城住
129	×	N08-2	天啓 6 年	1626	0812	大明國河南開封府祥符縣宣平坊居住
130	×	N09-1	崇禎 6 年	1633	0925	直隸大名府開州在城一會
131	△○	N09-2	康熙 11 年	1672	0413	長清齊河二縣張村店河西兩岸各里不全鄉居住
132	×	N09-3	崇禎 9 年	1636	1008	山東兗州府濟寧州迤西河長口居住
133	○	N10-0	崇禎 9 年	1636	1000	東會府輔國將軍朝瑯
134	×	◆N11-1	天啓 6 年	1626	0925	大明國京都順天府宛平縣王平社王平等處居住奉神泰山進香
135	○	N11-2	天啓 5 年	1625	1015	進香一次 河南周府醮主
136	△ ?	N12-1	康熙 6 年	1667	0413	□□□西南張村店各里不全人氏
137	△ ?	N12-2	康熙 6 年	1667	0413	□□河北□家庄各里不全人氏
138	×	N13-1	天啓 元 年	1621	1015	大明國山東兗州府濟寧州在城北鄉大務村居住
139	×	◆N13-2				詩文（見任江西副使張五典題『靈巖山景』）
140	×	N13-3	天啓 元 年	1621	1018	河南彰德府安陽縣府東河壩村居住
141	×	N14-1	萬曆 46 年	1618	1013	直隸鳳陽府亳州城西北□□店迤西四散居住奉神進香
142	×	N14-2	天啓 2 年	1622	0303	大明國河南開封府太康縣北黃集崗迤西居住
143	×	N14-3	崇禎 元 年	1628	0013	河南歸德府商丘縣馬狀集迤南
144	×	N15-1	萬曆 43 年	1615	0400	山東東昌府聊城縣六里八甲人氏見在李大夫營居住奉佛還願保安
145	×	N15-2	崇禎 元 年	1628	0113	大明國河南歸德府永城縣書案店迤東南大里村四散居住遊觀善府
146	×	N16-1	崇禎 11 年	1638	1020	大明國山東兗州府曹州曹縣見在楚丘西方居住三山進香
147	×	N16-2	萬曆 42 年	1614	1000	恭候檔防□善題名

末尾	上部	省	府	州	縣	會首氏名	總人數	女性	
天啓七年四月初四日立石碑	三山進香/留名	山東	兗州	鄆城	×		197	?	
順治十八年正月初五日		山東	濟南	歷城	徐□科		18	0	
		山東	濟南	歷城	謝□泰		22	?	
天啓六年正月初五日吉日全立		山東	濟南	歷城	?		19	0	
崇禎四年十二月初七日立	靈巖建醮	北直	大名	滑縣	楊子先		17	0	
		山東	東昌	濮州	范縣	丁邦□	9	0	
康熙六年		河南	開封		?		55	0	
崇禎參年十月初八日		北直	大名	長垣	盧應祥		14		
□佑□義修醮崇禎二年九月初九日建立季日		河南	開封	封邱	陳守法		23	0	
崇禎八年十月十五日立		河南	歸德	夏邑	岳秀虎		15	0	
崇禎捌年十月十五日建立		北直	大名	開州	劉先讀妻王氏		14	1	
崇禎八年十月十日□房主祖□立石		北直	大名	開州	劉天欽, 李宗孝, 李三畏		20	0	
康熙二十七年正月十一日立		北直	大名	開州	李春植		19	0	
崇禎九年十月初七日立		山東	兗州		單縣	段尤前	7	0	
崇禎八年正月十五日		北直	真定	趙州	隆平	(生員)白珏	11	0	
崇禎八年三月十五日立石		山東	濟南		長清	劉東清	16	1	
		北直				胡成	12	0	
萬曆三十九年八月十七日建醮		南直	鳳陽	宿州		王邦學	6	0	
順治十七年十月廿四日修醮		南直		徐州	蕭縣	王秀	11	0	
		三山進香				×	×	×	×
天啓二年四月廿二日	山東		濟南	泰安	李思智		17	0	
天啓四年正月	山西				?		5	0	
萬曆歲次己未孟春吉日立	河南		開封	祥符	文可, 趙明		16	0	
	河南		開封	祥符	王大學		6	0	
	北直		大名	開州	趙天祥		3	0	
崇禎元年十月十三日修醮					?		?	?	
萬曆四十八年三月初三日同建醮					?		16	0	
天啓元年十月十七日立石	建醮進香		山東	兗州	東平	許當學	14	0	
萬曆四十八年二月二十四□吉立	建醮進香		北直	真定	趙州	高邑	李邦粹	42	0
天啓元年十月二十三日立石			山東	兗州	城武	樊應秀	14	2	
天啓元年十月十五日立石			河南	開封	祥符	朱邦吉	13	0	
天啓六年八月十二日立			河南	開封	祥符	李文通	9	0	
崇禎六年九月二十五日全立			北直	大名	開州	趙朝資	16	0	
康熙十一年四月十三日立	兩山進香		山東	濟南		長清·齊河	劉應登	15	0
崇禎九年十月初八日全立			山東	兗州	濟寧	劉從吉	8	0	
崇禎玖年拾月吉旦		山東	濟南		×	1	0		
天啓陸季玖月貳拾伍日題名立建		北直	順天		宛平	王甫增	36	0	
天啓伍年拾月十三日住持洪申			河南	周府		鄆陵莊和王夫人趙氏	8	3	
康熙六年四月十三日吉旦						劉三恕, 劉□登	9	0	
						□敬	6	0	
天啓元年十月十五日立	朝泰山進香	山東	兗州	濟寧	李應臣		8	0	
□□四月孟夏吉日立					×	×	×	×	
天啓元年十月十八日吉立		河南	彰德		安陽	楊得時	16	0	
萬曆四十六年十月一三日立		南直	鳳陽	亳州		梁志道, 趙□	19	0	
天啓二年三月初三日立石		河南	開封		太康	蕭得貴	16	0	
崇禎元年□月十三日立		河南	歸德		商丘	張平梁	20	0	
萬曆四十三年四月 日立		山東	東昌		茌平	?	3	2	
崇禎元年十月十三日立 亙古太安之□		河南	歸德		永城	陳允□	8	0	
崇禎十一年十月廿日立		山東	兗州	曹州	曹縣	陳守富	10	0	
萬曆甲寅十月日立		北直	順天	池州		韓進魁	16	0	

17 世紀における泰山巡禮と香社・香會

No(1)	文様	No(2)	年號	西曆	日付	冒頭
148	×	N17-1	天啓 元 年	1621	1023	山東兗州府濟曹二州見在鉅野縣六興□集
149	×	N17-2	萬曆 47 年	1619	0308	河南南陽府葉縣北關居住泰山進香
150	×	N18-1	天啓 元 年	1621	1018	河南歸德府睢州城北屈村鄉伯當社居住
151	×	N18-2	崇禎 12 年	1639	1011	大明國直隸鳳陽府宿州仁義鄉高瀚亭南庄三村居住
152	×	N18-3	萬曆 45 年	1617	1018	梁仲和之孫梁曾之□子梁巨鄉等來奉佛
153	×	N19-0				大明國河南周府及開封府祥符等縣人氏見在省城住
154	×	N20-1	崇禎 元 年	1628	0109	泰安州城西南七十里庄頭村居住
155	×	N20-2	崇禎 6 年	1633	0014	濟南府長清縣馬家集居住奉佛信士
156	×	N21-0	崇禎 5 年	1632	0920	山東兗州府鄆城縣各鄉四散居住
157	×	N22-0				大明國山東濟南府長清縣迤西張店東北小庄居住奉佛信士
158	×	N23-0	康熙 6 年	1667	0725	河南歸德府商丘縣人氏見在城內外居住
159	×	N24-1	順治 14 年	1657	0915	山東濟南府齊河□□縣城北居住
160	×	N24-2	順治 14 年	1657	0915	山東兗州府東平州東阿縣德州劉西坎鋪地方居住
161	×	N25-1	順治 14 年	1657	0300	順治拾四年三月吉日濟寧州朝山題名
162	○	N25-2	萬曆 47 年	1619	0111	河南開封府儀封縣人氏見在河北舊縣城地方週園一境居住
163	×	N25-3	康熙 6 年	1667	0816	河南開封府祥符縣人氏見在城內居住奉佛朝山進香四次完滿
164	×	N26-1	萬曆 47 年	1619	0111	河南歸德府商丘縣人氏見在城東南□跡柳林集迤北居住
165	×	N26-2	康熙 9 年	1670	1003	山東兗州府金鄉縣人氏□□二集居住
166	×	N26-3	萬曆 45 年	1617	1021	山東兗州府曹州曹縣各里不同人氏見在城南土山集迤南王趙村週園居住
167	×	N26-4	康熙 4 年	1665	0122	山東兗州府東平濮州范縣□仲家營居住
168	×	N27-1	萬曆 45 年	1617	1018	大明國河南歸德府虞城縣成東北寓賢集居
169	×	N27-2	天啓 元 年	1621	1023	直隸大名府東明縣各里甲不同人氏見在鮑家村居住
170	×	N28-1	天啓 2 年	1622	0303	大明國直隸徐州城東北江庄村各鄉人氏
171	×	N28-2	天啓 2 年	1622		河南開封府杞縣各保里不同
172	×	N29-1	萬曆 45 年	1617	1021	河南開封府泰康縣人氏見在常鈴崗迤東一境四散居住佛進香保安信人
173	×	N29-2	天啓 2 年	1622	0303	大明國河南歸德府寧陵縣□□各□住
174	×	N29-3	崇禎 9 年	1636	1123	直隸大名府魏元二縣人氏
175	×	N30-1	天啓 元 年	1621	1015	河南歸德府寧陵縣稽古村居住
176	×	N30-2	萬曆 46 年	1618	0500	泰安州南關金橋各街居住奉佛施財信士
177	×	N31-1	天啓 元 年	1621	1012	大明國直隸鳳陽府宿州人氏見在界首店四散居住奉
178	×	N31-2	順治 11 年	1654	0919	河南歸德府虞城縣寓賢集居住奉
179	×	N31-3	天啓 元 年	1621	0215	大明國直隸徐州六鄉頭圖見在何家壩堆居住保安信仕人等奉
180	×	N31-4	康熙 3 年	1664	0921	濟南府濟陽縣城西槐李庄住奉佛修醮
181	×	N32-0	萬曆 47 年	1619	0115	淄川縣在城各街鄉村居住人氏聚□泰山香社一道朝參聖母院功隨喜靈巖
182	×	N33-0	天啓 2 年	1622	0112	大明國河南開封府太康縣各里社軍民人氏見在華陽崗一境四散居住朝山進香會首
183	×	N34-1	萬曆 41 年	1613	0926	大明國京都順天府涿州在城內外各庄村居住
184	×	N34-2	天啓 元 年	1621	1016	河南汝寧府上蔡縣城東北張鄉保張鄉店週園居住
185	×	N34-3	崇禎 8 年	1635	1016	大明國直隸徐州碭山縣浮溝社交崗□小遙村居住不同
186	×	N35-0				禹城縣迤南七里鋪四散居住
187	×	N36-1	天啓 元 年	1621	1027	河南開封府太康縣馬頭河四散居住
188	×	N36-2				山東兗州府曹縣城南土山集迤東
189	×	N36-3	崇禎 9 年	1636	1007	河南歸德府永城縣城東居住
190	×	N36-4	崇禎 9 年	1636		直隸鳳陽府宿州□□□□居住
191	△	N37-1	康熙 8 年	1669	0128	直隸大明府元城縣孫井店小湖村居住
192	△	N37-2	順治 17 年	1660	1003	河南歸德府睢州
193	△	N37-3	順治 17 年	1660	0327	濟南府歷城縣居住建醮信士
194	×	N38-0	崇禎 11 年	1638	1013	東昌府茌平縣人
195	×	N39-1	崇禎 12 年	1639	1011	崇禎十二年十月十一日□大明國直隸徐州三鄉八圖人氏見在曹都村□□□居住今會首龐進領合會人等
196	×	N39-2	崇禎 6 年	1633	1015	河南歸德府睢州迤北三皇社居住

末尾	上部	省	府	州	縣	會首氏名	總人數	女性
天啓元年十月二十三日立石		山東	兗州	濟寧·曹	鉅野	李三思	18	0
萬曆四十七年三月初八日記		河南	南陽		葉縣	張一貯	7	0
天啓元年十月十八日立		河南	歸德	睢州		任敬□	16	0
崇禎十二年十月十一日		南直	鳳陽	宿州		張國禎	13	0
萬曆四十五年十月十八日吉旦立						?	?	0
		河南	開封		祥符等	閆顧德	29	0
皆大明崇禎元年正月初九日立石		山東	濟南	泰安		周大敬	8	0
崇禎六年孟月十四日立		山東	濟南		長清	李思榮	17	0
崇禎伍年玖月二十日□□		山東	兗州		鄆城	秦守德	46	10
		山東	濟南		長清	張從義	32	6
康熙六年七月二十五日建醮立	道岸永登	河南	歸德		商丘	曹三善	18	0
大清順治十四年九月十五日建醮		山東	濟南		齊河	王□已	19	0
大清國順治十四年九月十五日一久各到坊建醮	三山進香	山東	兗州	東平		黃計泰	16	0
		山東	兗州	濟寧		許昇	14	0
萬曆四十七年正月十一日建醮立石		河南	開封		儀封	郭國學	13	0
康熙陸年八月十六日吉旦		河南	開封		祥符	父張汝愛	9	4
萬曆四十七年正月十一日建醮立石		河南	歸德		商丘	吳邦代	10	0
康熙九年十月初三日立		山東	兗州		金鄉	王緯	6	0
萬曆丁巳年十月二十一日立		山東	兗州	曹州	曹縣	趙學開	22	8
康熙四年正月廿二日	三山進香	山東	兗州	鄆·濮州	范縣	賈漢	15	0
萬曆肆拾伍年十月十八日立		河南	歸德		虞城	汪應鰲	5	0
天啓元年十月二十三日		北直	大名	開州	東明	鮑天平	16	0
天啓二年三月初三日立石		南直		徐州		吳珮	13	0
		河南	開封		杞縣	劉自錫朱氏	28	5
萬曆四十五年十月廿一日立		河南	開封		太康	劉守艾	14	1
天啓二年三月初三日立石		河南	歸德		寧陵	武魁	17	0
	崇禎九年十一月廿三	北直	大名		魏·元氏	賈三樂	11	0
天啓元年拾月十五日立		河南	歸德		寧陵	周拴	15	1
萬曆四十六年五月仲夏吉旦立		山東	濟南	泰安		□得郎呂氏	26	26
大明天啓元年十月十二日立石		南直	鳳陽	宿州		宋守仁	15	1
順治十一年九月十九日立		河南	歸德		虞城	盛國祥	13	1
天啓元年十月十五日立	進香	南直		徐州		夏應福	10	0
康熙三年九月廿一日立		山東	濟南		濟陽	□□蛟	16	0
萬曆四十七年一月十五日吉旦立		山東	濟南		淄川	杜景村、翟行縣、王□款等	113	38
皇明天啓二年正月十二日全立		河南	開封		太康	宋朝登	14	0
萬曆四十一年九月二十六日立		北直	順天	涿州		崔廷春	35	6
天啓元年十月十六日立石		河南	汝寧		上蔡	張國鑑	18	0
崇禎八年十月十六日全立		南直		徐州	碭山	吳安□	20	0
		山東	濟南		禹城	李邦勳	59	0
天啓元年十月二十七日□起		河南	開封		太康	李思正	11	2
		山東	兗州		曹縣	張亨善	2	0
崇禎九年十月初七日		河南	歸德		永城	罩思魁	15	2
						?	?	?
康熙八年正月廿八日		北直	大名		元城	柴國才	6	0
順治十柒年十月初三日	朝山題名	河南	歸德	睢州		陳國祥	11	0
大清順治十七年三月二十七日立	朝山題名	山東	濟南		歷城	趙一甲	28	3
崇禎十一年十月十三日		山東	東昌		茌平	張計全	11	0
		南直		徐州		龐進迫	13	1
崇禎六年十月十五日立		河南	歸德	睢州		□學禮	14	0

17 世紀における泰山巡禮と香社・香會

No(1)	文様	No(2)	年號	西曆	日付	冒頭
197	×	N40-1	崇禎 7 年	1634	0408	山東濟南府長清縣城西新店居住
198	×	N40-2	崇禎 11 年	1638		□□□□□□縣迤西
199	×	N41-1	天啓 7 年	1627	0317	大明國山東兗州東昌二府荏平縣城東二十里鋪迤前居住奉佛進香保安信士
200	×	N41-2	崇禎 11 年	1638	0915	河南歸德府睢州考城縣各鄉人氏俱在城內居住進香修醮十九人刊石於後
201	×	N42-1	天啓 元 年	1621	1208	河南開封府太康縣北黃巢迤西軍民等四散居住
202	×	N42-2	順治 18 年	1661	0912	山東兗州府東平州城東□城東社首
203	△	N43-1	崇禎 4 年	1631	0800	直隸宿州城西北人氏見在各庄居住奉
204	○	N43-2	康熙 9 年	1670	0254	濟南府齊河縣城南張村店居住
205	×	N44-1	康熙 5 年	1666	1104	山東兗州府城武縣九女集四散居住
206	×	N44-2	崇禎 6 年	1633	0916	山東兗州府城武縣迤西九女集四散居住
207	○	N44-3	順治 15 年	1656	0215	東昌府清平縣魏家塢
208	×	N45-0	崇禎 10 年	1637	0208	山東東昌府荏平縣各里不同人氏見在各庄居住
209	○	N46-1	萬曆 35 年	1607		順天府永清縣
210	○	N46-2	萬曆 35 年	1607		文安縣
211	○	N46-3	萬曆 47 年	1619	0428	濟南府章丘縣東錦鄉孟家峪庄各住信人姓名
212	○	N46-4	萬曆 35 年	1607		康平縣人
213	○	N47-1	萬曆 35 年	1607		天津衛
214	○	N47-2	萬曆 35 年	1607		南宮縣
215	○	N47-3	萬曆 35 年	1607		武定州
216	○	N47-4	萬曆 35 年	1607		真定府井陘縣
217	○	N47-5	萬曆 35 年	1607		濟寧州施財壽官
218	○	N47-6	萬曆 35 年	1607		長清縣前右都庄
219	○	N48-1	天啓 元 年	1621	0300	京都順天府宛大二縣宣武門外居住
220	○	N48-2	天啓 元 年	1621	0300	東兗州府東平州□二郡各村居住進香
221	○	N49-1	崇禎 元 年	1628	1013	河南歸德府商丘縣城東西濟陽集各□不同人氏進香修醮
222	○	N49-2	萬曆 46 年	1618	0727	大明國直隸鳳陽府潁州北鄉十二圖人氏見在□河迤東三官廟迤西居住
223	○	N50-1	天啓 元 年	1621	1013	山東兗州府曹州城北五里鄉付家堂四散居住
224	○	N50-2	天啓 元 年	1621	1012	大明國山東濟南府武定州各鄉不同人氏見在支角鎮居住
225	×	N51-0	天啓 元 年	1621	1005	大明國直隸徐州城東北江庄村各鄉人氏
226	○	N52-0	萬曆 47 年	1619	0200	河南懷慶府河內濟源孟縣各里不同人氏見在□大簡里奉林朱村官庄鎮新□趙順孟家庄李家滑塢兩永□□各村居住佛修醮保安
227	○	N53-1	萬曆 47 年	1619	0700	東阿縣城北銅城人氏見在賈庄村四散居住奉佛修醮
228	○	N53-2	康熙 4 年	1665	0122	山東兗州府東平州各縣不同人氏今在張秋連□□居住
229	×	N54-1	崇禎 元 年	1628	1004	東昌府清平聊城二縣高佛堂寺西居住
230	×	N54-2	崇禎 元 年	1628	1004	山東東昌府濮州城西南玉皇廟居住
231	×	N55-1				泰安州□□□□居住
232	×	N55-2	萬曆 46 年	1618		『宿靈巖寺』
233	×	N56-1	崇禎 10 年	1637	0115	濟南府長清縣城西□保九甲太王家庄
234	×	N56-2	崇禎 10 年	1637	0115	山東濟南府泰安州城西南□十里各庄居住
235	×	N56-3	崇禎 10 年	1637	0116	山東濟南府歷成縣岳家□
236	×	N57-0	崇禎 10 年	1637	0115	濟南府泰安州萊蕪縣北鄉石城保腰官庄居住
237	△	N58-0	順治 17 年	1660	0300	兗州府濟寧州南城七鋪軍民人氏見在各街居住朝山進香信士
238	×	N59-1	崇禎 3 年	1630	0408	大明國山東濟南府歷城縣在城各地方居住泰山香會一道篤里山建醮一壇靈巖建醮一壇姓名開列於後
239	×	N59-2	崇禎 6 年	1633	0926	兗州府鄒縣城北第四鄉軍民人等修醮二次信士
240	×	N59-3	順治 14 年	1657	0324	濟南府歷城縣各里人氏現在□□鎮居住茲靈巖建醮戴新店衆名以誌不朽
241	○	N60-1	順治 17 年	1660	0300	兗州府濟寧州南城七鋪人氏見在四散居住進香
242	○	N60-2	天啓 6 年	1626	0215	直隸大名府開州城垣伴鄉村居住姓名于後
243	○	N60-3	天啓 6 年	1626	0308	東平州城東古□寺週遶居住進香
244	×	N61-1	順治 17 年	1660	1018	河南歸德府永城縣買頭集四散人等

末尾	上部	省	府	州	縣	會首氏名	總人數	女性
崇禎七年四月初八日	靈巖題名	山東	濟南		長清	□□	20	0
崇禎十一年立						□田	18	0
天啓七年三月十七日立		山東	鄒・韜		荏平	徐□誄	17	1
皇明崇禎十一年九月十五日立		河南	歸德	睢州	考城	章蘭	19	1
天啓元年十二月初八日立石		河南	開封		太康	蕭得貴	16	0
順治拾捌年九月十二日全立		山東	兗州	東平		林茂柏	33	3
崇禎四年八月靈巖寺僧官隆孝房主隆□日立		南直	鳳陽	宿州		趙印	14	4
康熙九年閏二月二十四日立		山東	濟南		齊河	劉應登	9	0
康熙五年十一月初四日全立		山東	兗州		城武	冉振興	13	0
崇禎六年九月十六日立		山東	兗州		城武	梁仲仁	15	0
順治十五年二月十五日建立	三山進香	山東	東昌		清平	王奇相	18	0
崇禎十年二月初八日立石	靈巖標名	山東	東昌		荏平	李崑玉, 李亭秀	47	0
		北直	順天		永清	李尙策	11	0
		北直	順天	霸州	文安	張蒲	11	1
萬曆四十七年四月廿八日建醮立		山東	濟南		章丘	徐門賈氏(他2名)	22	16
					廣平	來思溫	12	1
		北直	河間		天津衛	武仕	12	0
		北直	真定	冀州	南宮	邢子整	12	0
		山東	濟南		武定	王繼本張氏	23	20
		北直	真定		井陘	杜敦厚	5	0
		山東	兗州	濟寧		喬繼先	1	0
		山東	濟南		長清	王門董氏	22	16
		北直	順天		宛平・大興	劉佩	14	0
天啓元年三月吉日立	東平州	山東	兗州	東平		鄭自安	17	0
崇禎元年十月十三日在北□		河南	歸德		商丘	劉安	13	0
萬曆四十六年七月二十七日立		南直	鳳陽	潁州		劉國□	8	0
天啓元年十月十三日立石		山東	兗州	曹州		付依靜(他2名)	38	0
大明天啓元年十月十二日立石		山東	濟南		武定	楊宗藍	31	6
天啓元年十月初五日立石		南直		徐州		吳珮	37	0
萬曆四十七年二月日		河南	懷慶		河內・濟源・孟	李守相	11	0
萬曆四十七年七吉日立	三山進香	山東	兗州		東阿	齊周母趙氏	27	6
康熙四年正月廿二日立		山東	兗州	東平		張□美	20	0
		山東	東昌		清平・聊城	李宗文	6	0
崇禎元年十月初四日立石		山東	東昌	濮州		劉治民	11	0
		山東	濟南	泰安		張計登	12	0
萬曆戊午春日楚黃李春潮題						×	×	×
崇禎十年正月十五日立	碑記	山東	濟南		長清	王奉州, 王準	20	0
崇禎十年正月十五日立		山東	濟南	泰安		王弼	15	0
崇禎十年正月十六日		山東	濟南		歷城	于進忠	19	6
崇禎十年正月十五日立	碑記	山東	濟南	泰安	萊蕪	張學貢	22	0
大清順治十七年三月四次立石	三山進香	山東	兗州	濟寧		吳允高	52	30
崇禎三年四月初八日立石		山東	濟南		歷城	王京	20	8
崇禎六年九月二十六日全立		山東	兗州		鄒縣	王□	32	0
順治十四年三月二十四日全立		山東	濟南		歷城	喬住	24	0
大清順治十七三月立石	朝山進香	山東	兗州	濟寧		張門邢氏	20	16
天啓六年二月十五日立牌記		北直	大名	開州		侯光啓	52	4
天啓六年三月初八日建醮二次立石	東平州	山東	兗州	東平		鄭自安	29	6
順治十七年十月十八日進香立		河南	歸德		永城	楊國祥	15	0

17 世紀における泰山巡禮と香社・香會

No(1)	文様	No(2)	年號	西曆	日付	冒頭
245	×	N61-2	順治 17 年	1660	0021	山東兗州府各州縣籍貫不同現在濟寧州北十里鋪孟家營居住
246	×	N61-3	崇禎 6 年	1633	0115	山東兗州府濟寧□鉅野縣各鄉里甲人氏見在城西北各吳家堂居住
247	×	N62-1	崇禎 元 年			浙西□李朱奇珍汪洵周延□顧□沈廷錫吳□乾偕駕岱麓是迺靈巖□
248	×	N62-2	崇禎 9 年	1636	1002	直隸廣平府邯鄲縣西小屯村
249	○	N63-1	天啓 6 年	1626	0326	山東濟南府歷城縣在城各地方居住全朝謁泰山靈巖修醮一壇題名于後
250	×	N63-2	天啓 6 年	1626	0900	山東濟南府肥城縣孝德鄉居仁辛興二社
251	×	N63-3		1626		濟南府長清齊河二縣河西□各里不全
252	×	N64-0	崇禎 11 年	1638	1022	河南開封府杞縣迤西南地各□□壠居住
253	×	W01-1	天啓 元 年	1621	1027	山東濟南府歷城縣城東各庄居住
254	×	W01-2	康熙 4 年	1665	0615	河南歸德府商丘縣十里鋪
255	○	W02-1	萬曆 39 年	1611		長清縣師家庄施財題名
256	○	W02-2	萬曆 39 年	1611	0117	直隸大名府大名縣□□□居住
257	○	W02-3	萬曆 39 年	1611	0817	直隸淮安府邳州各廂社衛舍客民人等
258	○	W03-1	萬曆 35 年	1607		濟南府布政司街施財善人莫如社施銀壹兩
259	○	W03-2	萬曆 35 年	1607		兗州府曹州各里人氏見在城內外居住
260	○	W03-3	萬曆 35 年	1607		直隸大名府□豐縣許村集居住
261	○	W04-1	萬曆 35 年	1607		臨清州
262	○	W04-2	萬曆 35 年	1607		武定州田家庄
263	○	W04-3	萬曆 35 年	1607		濟陽縣趙家庄
264	○	W04-4	萬曆 35 年	1607		山西路安府長治縣信人
265	○	W04-5	萬曆 35 年	1607		東昌府濮州
266	○	W05-1	萬曆 35 年	1607		長清施財
267	○	W05-2				
268	×	W06-1	崇禎 7 年	1634	1005	大明國直隸大名府內黃縣西北西高城村地方□居住奉佛進香修醮同會到此掛名于後
269	△	W06-2	康熙 6 年	1667	1104	濟南府齊河縣城南張□□居住
270	×	W06-3		1634		陝西西安府□□韓城縣禮部儒官
271	×	W07-1				濟南府布政司街居住
272	×	W07-2				南皮縣泊頭鎮河東岸會
273	△	W07-3	順治 13 年	1656	0123	濟南府泰安州東南□□集各保不同人氏
274	×	W07-4	崇禎 2 年	1629	0113	兗州府東平州平陰縣城西大義集
275	×	◆ W08-0	萬曆 39 年	1611	1016	
276	×	▼ W09-1	萬曆 40 年	1615	0913	河南開封府祥符縣人氏見在省城各地居住香頭會首趙高禮等
277	×	▼ W09-2	萬曆 43 年	1612	0300	直隸揚州府江都縣
278	?	▼ W10-0				河南歸德府祥符縣
279	×	▼ W11-0			0010	大明國兗府□□□鄆城縣城北居住
280	×	W12-1	萬曆 41 年	1613	1025	大明國河南歸德府睢州一會 全立□
281	×	W12-2	天啓 4 年	1624	0115	大明國河南周府開封府祥符縣人氏見在省城居住
282	×	W13-0				詩文
283	×	W14-0	萬曆 42 年	1614	冬月	徐州城北濁河居住
284	×	W15-0	萬曆 39 年	1611	1016	大明國河南開封府祥符陳留縣縣人氏各方保居住見在槐林保雙塚週邊居住奉佛
285	△	W16-1	萬曆 35 年	1607		京都順天府涿州東關廂居住一會人等
286	△	W16-2	萬曆 40 年	1612	1023	山東兗州府曹縣黃堽集
287	×	◆ W17-0			0823	□□化龍
288	×	W18-0				詩文
289	×	W19-1	萬曆 45 年	1617	0800	直隸鳳陽府宿州城里關外居住
290	×	W19-2	萬曆 48 年	1620	0324	大明國山東兗州府濟寧州鄆城縣見在城南玉皇廟東北林家庄居住
291	×	◆ W20-1	萬曆 35 年	1607		河間府滄州南皮縣
292	×	◆ W20-2				官庄施木善人
293	○	W21-1	萬曆 35 年	1607	0320	山東濟南府德州城東南小土橋迤西張家庄
294	○	W21-2	萬曆 35 年	1607		平原縣

末尾	上部	省	府	州	縣	會首氏名	總人數	女性
順治庚子□春念一□全立石	建醮	山東	兗州	濟寧		陳仁	10	0
崇禎六年一月十五日立		山東	兗州	鉅野		楊一教	11	0
崇禎戊辰年		山東	濟南	德州		×	6	0
崇禎玖年拾月二十日立牌萬世流芳		北直	廣平		邯鄲	鄭嘉	18	0
大明天啓六年三月二十六日立牌萬世流芳		山東	濟南		歷城	顧計儒	35	20
天啓六年九月		山東	濟南		肥城	嚴添喜, 馬西	20	0
		山東	濟南		長清・齊河	陳綰	17	0
崇禎十一年十月二十二日立		河南	開封		杞縣	邵學仁	7	0
天啓元年拾月貳拾柒日吉日立石		山東	濟南		歷城	李殿	41	0
康熙四年六月十五日		河南	歸德		商丘	曹三善	12	0
		山東	濟南		長清	李門趙氏	34	5
萬曆三十九年正月十七日立		北直	大名		大名	安東陽	12	0
萬曆三十九年八月十七日立石		南直	淮安	邳州		余秉清	21	0
		山東	濟南			×	1	0
		山東	兗州	曹州		周尙義	11	1
		北直	大名		清豐	王惟儉	6	1
		山東	東昌	臨清		徐文科	16	7
		山東	濟南	武定		田住	11	4
		山東	濟南		濟陽	趙守節妻崔氏	10	6
		山西	潞安		長治	□國□	1	0
		山東	東昌	濮州		李汝□	7	0
		山東	濟南	德州	平原	?	?	?
						?	?	?
崇禎柒年拾月初伍日記	二山進香	北直	大名		內黃	馬永寧	24	0
康熙六年十一月初四日立		山東	濟南		齊河	劉應登, 劉三恕	16	0
男□登全立		陝西	西安		韓城	?	?	?
		山東	濟南			莫如士	9	0
	進香建醮	北直	河間		南皮	張崇陽	11	0
順治十三年正月二十三日		山東	濟南	泰安		□洪志	12	0
崇禎貳年正月十三日吉旦		山東	兗州	東平	平陰	儒官畢講用	25	0
萬曆三十九年十月十六日修醮立						?	13	0
萬曆四十年九月十三日修醮		河南	開封		祥符	趙尙禮	10	0
萬曆四十三年三□□三日立		南直	揚州		江都	錢應元	5	0
		河南	歸德		祥符	?	?	?
初十日立		山東	兗州		鄆城	□□□	17	0
萬曆四十一年十月二十五日同全立誌		河南	歸德	睢州		秦文義	14	3
天啓四年正月十五日題名		河南	開封		祥符	朝翰	7	0
						×	×	×
萬曆甲寅年冬月主僧玉光全立		南直		徐州		吳鎧	8	0
萬曆三十九年十月十日修醮立		河南	開封		陳留	王汝錫	22	11
		北直	順天	涿州		李登瀛	6	1
萬曆四十年一月廿三日立		山東	兗州		曹縣	劉如會	16	0
孟秋月念三日						×	×	×
壬子冬月同兄興國						×	×	×
萬曆丁巳年仲秋吉旦		南直	鳳陽	宿州		王□李	10	1
萬曆四十八年三月二十四日立		山東	兗州	濟寧	鄆城	睢九惠, 林應科	14	6
		北直	河間	滄州	南皮	劉才高	12	0
						趙應仁	29	0
萬曆三十五年歲次丁未季春末旬吉旦		山東	濟南	德州		張村保	27	2
		山東	濟南	德州	平原	馮儒	3	0

17 世紀における泰山巡禮と香社・香會

No(1)	文様	No(2)	年號	西曆	日付	冒頭
295	○	W21-3	萬曆 35 年	1607		南皮縣城西北十八務庄
296	○	W21-4	萬曆 35 年	1607		徐州施財善人
297	○	W21-5	萬曆 37 年	1609	0410	楊州府江都縣小東門外關王廟前皮廂店信士尹尙忠法名眞滋號小洋
298	○	W22-1	萬曆 35 年	1607		直隸河間府景州東光縣玉河西岸馬頭鎮會首孫守仁
299	×	W22-2	萬曆 35 年			劉家庄
300	×	W23-1	萬曆 37 年	1609	0202	山西汾州孝義縣西鄉劉家庄□□□鎮等各各村居住奉施財
301	×	W23-2	順治 17 年	1660	1014	河南永城縣
302	×	W23-3	萬曆 38 年	1610	1017	河南開歸二府儀考兩縣各里人氏不同見在石家樓左家集相□居住
303	×	W23-4				
304	×	W23-5				□□齊河信女高門□氏
305	×	W24-1	萬曆 37 年	1609	0324	
306	×◆	W24-2				山東茌平縣各居鄉村奉
307	○▼	W25-0				濟南府歷城縣城東下井庄會首
308	×▼	W26-1	萬曆 37 年	1609	0320	鎮居住
309	×▼	W26-2				
310	×▼	W27-1	萬曆 37 年	1609	0324	直隸徽州府歙縣人氏見在臨清州居住施財信士
311	△▼	W27-2	順治 17 年	1660	1009	江南徐州各鄉圖人氏見在拆衆村居住奉佛進香建醮會首
312	○	W28-1	萬曆 37 年	1609	0324	直隸河間府景州故城縣長林村居住
313	○	W28-2	萬曆 37 年	1609	0324	棗鄉縣劉家庄居住
314	○	W28-3	萬曆 37 年	1609	0324	濟南府歷城齊河縣各鄉居住施財信士
315	△	W29-0	萬曆 38 年	1610	0225	大明國河南山東兗州府濟寧州西鄉等各圖民見在城西河長口噶里集居住修醮施財
316	×	W30-1				本府歷城長清二縣人氏見在中店舖居住
317	×	W30-2				青州府壽光縣人氏在城馬□住
318	×	W30-3			1027	府滑縣高陽□蔡胡等京村居住
319	△	W30-4	天啓 元 年	1621	1027	直隸大名府開州長垣縣東北方□重集居住各里不同
320	×◆	W31-0				大明國河南山東各府州縣里都鄉保不同人氏見在曹考二縣地方星散居住 奉佛朝山進駕保安篤信會首張應芳等糾領衆會人等前至靈巖修醮
321	×▼	W32-1	萬曆 38 年	1610	1018	河南歸德府睢州龍書崗迤北居住
322	×▼	W32-2	康熙 9 年	1670	0200	山東兗東二府東濮二州范縣城南仲家當居住
323	×▼	W32-3	萬曆 41 年	1613	0927	直隸順德府鉅鹿縣南韓社城南十二里孔家寨
324	△	W33-1	萬曆 38 年	1610	0928	河南開封府許州臨潁縣城東北居住
325	×	W33-2	順治 14 年	1657	0920	大清國兗州府東平州汶上縣城南義高北方居住
326	×	W33-3				河南歸德府寧陵縣安寧鄉楊家店週邊居住
327	×	W34-0	萬曆 42 年	1614	0322	大明國山東兗東二府濟寧州臨濟二衛軍民人等俱在城西安居永通開交河村 住朝泰山進香赴靈巖寺修醮會首王門唐氏
328	×◆	W35-1			0014	
329	×◆	W35-2	萬曆 39 年	1611	1015	兗州府曹縣人氏見在焦家口居住
330	×	W36-1	萬曆 37 年	1609		臨清州城西灘頭村洪東□
331	×	W36-2				山東東昌府臨清州舊城裡天街居住
332	×	W36-3				河南永寧二府
333	○	W36-4	萬曆 37 年	1609	0322	直隸廣平府廣平縣董村等社人氏見在西董村居住奉佛施財會首
334	×	W36-5				丁丑歲歷下□禱進靈巖述半偈曰
335	×	W37-1				長清縣吉家峪捨財信人
336	△	W37-2	康熙 5 年	1666	1104	大清國山東兗州府曹州曹縣□□□進北方住
337	×	W37-3				兗州府濟寧州人氏見在南關居住會首
338	×	W37-4				河南開封府祥符縣人氏
339	×	W37-5				長清縣邵家庄信士
340	×	W37-6	天啓 元 年	1621	1028	河南歸德府寧陵縣迤南溝香集居住
341	×	W38-1	萬曆 38 年	1610	1017	河間府南皮縣
342	×	W38-2	萬曆 38 年	1610	1017	

末尾	上部	省	府	州	縣	會首氏名	總人數	女性
於萬曆三十七年四月初十日發心施銀三錢		北直	河間		南皮	趙思義	4	1
		南直		徐州			8	1
		南直	揚州		江都		1	0
		北直	河間	景州	東光	孫宗仁	35	0
萬曆三十七年二月初二日 順治十七年十月十四日立 萬曆三十八年十月十七日立							43	1
		山西		汾州	孝義	侯□臣	9	0
		河南	歸德		永城		7	0
		河南	歸德		儀封・考城	王濟	8	0
萬曆三十七年三月二十四日立						王朝仁	13	0
		山東	濟南		齊河	高門□氏	3	3
						?	?	?
		山東	東昌		茌平	□□道	22	0
□□□拾陸年 萬曆三十七年三月二十□□		山東	濟南		歷城		36	36
						?	?	?
						?	?	?
						?	?	?
萬曆三十七年三月二十四日立 順治十七年十月初九日立		南直	徽州		歙縣	李文陞	12	8
		南直		徐州		范養德	8	0
		北直	河間	景州	故城	孫永才	7	0
		北直	河間		棗鄉	張汝岳	12	0
萬曆三十七年三月二十四日建醮 萬曆參拾捌年貳月貳拾伍日立施銀五錢		山東	濟南		歷城・齊河	靖萬方	16	0
		山東	兗州	濟寧		馬子才	16	0
		山東	濟南		歷城・長清	彭朝榮	15	0
		山東	青州		壽光	趙向然	6	0
十一年十月二十七日 天啓元年十月廿七日立石		河南	開封		滑縣	侯□□	6	0
		北直	大名	開州	長垣	劉永貴	12	0
		南直	徽州			張應方(他3名)	34	0
萬曆三十八年十月十八日立 康熙九年二月立 癸丑年九月二十七日立 萬曆三十八年九月二十八日立吉 修醮順治十四年九月二十日立石	三山進香	河南	歸德	睢州		陳□	5	0
		山東	兗州	東平・濮州		羅士珂	10	0
		北直	順德		鉅鹿		18	0
		河南	開封	許州	臨潁	李九良	11	0
萬曆四十二年三月二十二日立	萬古流芳朝三山進香	山東	兗州	東平	汶上	張起鶴	15	0
		河南	歸德		寧陵	韓子忠	8	0
		山東	兗州	濟寧	臨濟二衛	王門唐氏	19	8
						?	?	?
…十四日立 萬曆三十九年十月十五日建立		山東	兗州		曹縣	柳官	17	0
		山東	東昌	臨清		楊士安	28	0
		山東	東昌	臨清		馬元先	9	0
						?	?	?
以上共銀二匁二錢三卜 萬曆三十七年正月二十二日立		河南				來思溫	22	5
		山東	濟南				9	0
		山東	濟南		長清	王子學	5	0
		山東	兗州	曹州	曹縣	李春芳	9	0
康熙五年十一月初四日立	二山進香	山東	兗州	濟寧		張門齊氏	8	0
		河南	開封		祥符	張化蛟	15	0
		山東	濟南		長清	王隨	4	0
		河南	歸德		寧陵	李守成	12	0
天啓元年十月廿八日立石	尙□店住	北直	河間		南皮	史英		
						賀從善	10	0

17 世紀における泰山巡禮と香社・香會

No(1)	文様	No(2)	年號	西曆	日付	冒頭
343	×	W38-3	萬曆 38 年	1610	1017	河南歸德府寧陵縣馬頭村湖濱廟居住
344	△	W38-4	順治 14 年	1657	0927	河南歸德府睢州迤北龍塘集居住
345	×	W39-1	萬曆 37 年	1609	0324	長清縣土門店善人劉世榮單氏
346	×	W39-2	萬曆 37 年	1609	0324	濟陽縣夏口鎮一北 上同母王氏
347	×	W39-3	萬曆 37 年	1609	0324	山東青州府昌樂縣曹房張次等社
348	×▼	W40-0	萬曆 37 年	1609		山東濟南府禹城齊河縣人氏俱在城南王家鋪方庄居住靈巖修醮施合山齋二晝夜保安信士
349	×	W41-1		1608		『咏靈巖獻殿重構』
350	△	W41-2	順治 14 年	1657	0920	大清國山東濟南府陵縣城東各庄居住
351	△	W41-3				順天府□□縣霸州文安縣生員晁榮□
352	×	W42-0				詩文
353	×	W43-1	萬曆 38 年	1610	1018	河南歸德府睢州龍塘崗居住
354	×	W43-2	萬曆 38 年	1610	1018	河南歸德府睢州龍塘崗北東蒿里山
355	×	W43-3	萬曆 38 年	1610	1018	河南歸德府睢州城北龍塘崗居住
356	△	W44-1	順治 17 年	1660	1014	大清國山東兗州府漁臺縣城裡關外四散住
357	×	W44-2	萬曆 38 年	1610	0300	詩文
358	△	W45-1				詩文(東平梁南華)
359	×	W45-2	順治 14 年	1657	0808	大清國河南開封府杞縣人氏見在城內外居住
360	×◆	W46-0	萬曆 38 年	1610	0928	直隸大名府開州迤南掘地方圓居住
361	×	W47-1				鉅野縣葉家營居住
362	×	W47-2	萬曆 42 年	1614	1013	河南開封府扶溝縣各保不同
363	△	W47-3	順治 17 年	1660	1021	山東東昌府冠城西□庄□田各庄各里□頭
364	×	W47-4	萬曆 38 年	1610	1018	直隸廣平府邯鄲縣伐召社見在東嶽家□
365	×	W48-0	萬曆 37 年	1609	0019	大明國直隸徐州沛縣夏鎮□河西岸居住
366	○	W49-1	萬曆 37 年	1609	0408	參次禮懺齋僧捨財碑記 山東濟南府德州人氏
367	○	W49-2	萬曆 37 年	1609	0408	浙江金華府義烏縣人氏
368	○	W49-3	萬曆 37 年	1609	0408	紹興府餘姚縣人氏
369	×	W50-1				真定府安平縣西王家庄善人
370	×	W50-2				直隸真定府藁城縣提一村居住奉佛信士
371	×	W50-3	萬曆 43 年	1615	0310	山東兗州府東平州平陰縣牛家店一方各庄居住奉佛朝山進香施財社首
372	×	W50-4	萬曆 43 年	1615	0310	肥城縣崇德社人
373	△	W50-5	康熙 8 年	1669	0821	兗州府金鄉縣東關居住
374	×	W51-1	萬曆 35 年	1607	1018	直隸大名府魏縣進士許邦興知山東陽信等率施財善人劉一清見在城南路固村帶管劉家庄王家庄居住
375	×	W51-2				直隸河間府東光縣玉河西岸馬頭鎮北王家庄居住
376	×	W51-3				
377	×	W51-4				
378	×	W51-5	康熙 4 年	1665	0923	康熙四年九月二十三日河南歸德府睢州人氏見在龍塘崗住奉
379	×	W52-1	萬曆 39 年	1611	1000	河南開封府杞縣迤南黃盆堙居住奉佛信士會首席守立
380	×	W52-2			1015	軍□□人氏見在 村 居
381	×	W52-3	天啓 元 年	1621	1013	
382	×	W53-0	萬曆 42 年	1614	1000	泰安州善人題名
383	○	W54-0	萬曆 42 年	1614	0827	直隸徐州城□□□各隅居住奉佛施財進香修醮信士會首周全等計開施□十二□
384	×	W55-1	萬曆 41 年	1613	1020	河南開封府杞縣人氏
385	△	W55-2	順治 17 年	1660	1015	山東兗州府東平州東阿縣□北參山進香□□□
386	×	W56-1	萬曆 42 年	1614	1017	山東兗州府曹州曹縣梁亭集週遠居住
387	△	W56-2	順治 17 年	1660	1021	直隸真定府晉州饒陽縣丹往社庄
388	×	▼W57-1			1001	直隸徐州碭山縣蒲□社
389	×▼	W57-2	萬曆 42 年	1614	1024	□縣□□丘
390	×	W58-1				詩文
391	×	W58-2				詩文
392	×	W58-3	天啓 3 年	1623		大明國山東東昌府濮州□□□各里保不同□□集迤北四散居住信士會首

末尾	上部	省	府	州	縣	會首氏名	總人數	女性
萬曆三十八年十月十七日施財記	萬古流芳	河南	歸德		寧陵	梅進忠	8	?
順治十四年九月二十七日全立		河南	歸德	睢州		李有全	32	0
		山東	濟南		長清	劉世榮單氏	13	10
		山東	濟陽				7	4
萬曆三十七年三月二十四日立	三山進香	山東	青州		昌樂	王進常	16	0
萬曆三十七		山東	濟南		禹城・齊河	□衣恩□氏, □□李氏	140	?
萬曆戊申孟冬來遊靈巖見韓居士重修獻殿…徐秉雲書						×	×	×
順治拾肆年九月二十日建醮		山東	濟南		陵縣	劉紅秀	17	0
	三山進香					?	?	?
						×	×	×
		河南	歸德	睢州		邵國賢	13	0
		河南	歸德	睢州		呂汝□	13	0
萬曆三十八年十月十八日立	三山進香	河南	歸德	睢州		羅□	10	0
順治十柒年拾月拾肆日建醮		山東	兗州		魚臺	姜文訓	19	7
庚戌季春訪弟子永清						×	×	×
修殿玉光上人留我手□并講南□						×	×	×
順治十四年八月初八日立	朝三山修醮	河南	開封		杞縣	王鳳元	22	0
萬曆三十八年九月二十八日立施銀壹錢		北直	大名	開州		趙希曾	12	0
		山東	兗州		鉅野	田加勝張氏	12	4
		河南	開封		扶溝	楊紀	8	0
萬曆四十二年十月十三日	朝三山修醮	山東	東昌		冠縣	齊新茂	25	11
順治十柒年十月二十一日全立		北直	廣平		邯鄲	曹九德	6	0
萬曆三十八年十月十八日立		南直		徐州	沛縣	孫交良張氏	54	29
萬曆三十七年		山東	濟南	德州		程宣	7	4
萬曆三十七年四月初八日立	朝三山修醮	浙江	金華		義烏	楊文魁	16	6
		浙江	紹興		餘姚	□炳	23	13
		北直	真定		安平	王世毫	23	0
		北直	真定		藁城	□進□	28	0
萬曆四十三年春季月初十日吉旦立石	朝山進香	山東	兗州	東平	平陰	路朝政	16	0
		山東	濟南		肥城	安應奇	9	0
康熙八年八月廿一日立		山東	兗州		金鄉	徐□	13	5
萬曆三十五年十月十八日建醮		北直	大名		魏縣	劉一清	12	0
	朝山進香	北直	河間		東光	王宗和	15	0
						李得時	4	0
						劉尙智	18	2
		河南	歸德	睢州		李有全	48	16
萬曆三十九年十月吉日立	朝山進香	河南	開封		杞縣	席守立	12	0
順治□七年十月十五日立						□□	10	1
天啓元年十月十三日立						郭濯	10	0
萬曆甲寅孟冬之吉主家王光全立		山東	濟南	泰安		高智	24	0
萬曆甲寅年八月二十七日僧官王光徒孫玄文	朝山進香	南直		徐州		周全	17	0
萬曆四十一年十月二十日立		河南	開封		杞縣	楊大祥	17	0
大清國順治十柒年拾月拾伍日		山東	兗州	東平	東阿	郭化行	28	5
萬曆四十二年十月十七日立		山東	兗州	曹州	曹縣	張九肖	15	0
大清國順治十七年十月二十一日	朝山進香	北直	真定	晉州	饒陽	尹貫式	5	0
□□冬拾九年十月初一全立		南直		徐州	碭山	□□□	21	0
萬曆四十二年十月廿四						?	?	?
歷下王家相						×	×	×
□山鄭仕	北□□□					×	×	×
天啓三年		山東	東昌	濮州		□□□	?	?

17 世紀における泰山巡禮と香社・香會

No(1)	文様	No(2)	年號	西曆	日付	冒頭
393	×	W59-1				詩文
394	×	W59-2				甲寅春王□鋪鄭汝行丘道
395	×	W59-3	萬曆 45 年	1617	1126	大明國河南懷慶府武陟縣待賢等鄉各里不同□□進香修醮保安信士會首
396	×	W60-0	萬曆 46 年	1618	0905	直隸徐州城內各隅居住奉佛進香建醮
397	○	W61-1	萬曆 42 年	1614		直隸徐州水次倉居住
398	×	W61-2			0300	直隸□府滑縣合山會首
399	×	W61-3	萬曆 42 年	1614		河南汝寧府光州息真式□人氏□庄校橋方圓居□□
400	×	W61-4				
401	×	W62-1	萬曆 47 年	1619	0114	兗州府曹州定陶縣各村不同三村居住
402	△	W62-2				
403	△	W63-1	康熙 元 年	1662	1018	山東兗州府魚臺縣西陽鎮河西岸居住人
404	×	W63-2	萬曆 42 年	1614	0110	兗州府濟寧州鉅野縣東北大佃戶屯居住
405	×	W63-3	康熙 3 年	1664	0809	山東兗州府濟寧州城內關廟各街居住奉佛建醮
406	×	W64-1	萬曆 42 年	1614	1000	兗州府平陰縣孝直集善人
407	×	W64-2	萬曆 47 年	1619	0112	河南開封府中牟縣蓋秦保七甲人氏見在河東村居住
408	×	W64-3	天啓 元 年	1621	1016	
409	○	W65-1				景州城北夏家庄助財善人
410	○	W65-2	萬曆 35 年	1607		樂陵縣城東劉家庄善人
411	○	W65-3	萬曆 40 年	1612	1025	河南歸德府商丘縣順河集居住
412	○	W65-4	萬曆 40 年	1612	1025	兗州府嶧縣曹庄集居住
413	○	W65-5	萬曆 35 年	1607		肥□縣鄭家庄信女鄭門郭氏
414	○	W66-0	萬曆 40 年	1612	0909	開封府祥符縣人氏因朝泰山□□□靈巖

末尾	上部	省	府	州	縣	會首氏名	總人數	女性
歷下丘養晦						×	×	×
□□殷興賢同□靈巖各書□□□紀歲月興覺書						×	×	×
皆大明萬曆肆拾伍年歲次丁巳十一月壬子貳拾陸日全立		河南	懷慶		武陟	□□□	30	0
萬曆肆拾陸年玖月初三日立匠役李□		南直		徐州		周全	25	9
萬曆四十二年日立		南直		徐州		劉岳	8	0
□一年三月		北直	大名		滑縣	?	32	0
萬曆四十貳年 房□□官王光諱慶珠	朝□進香	河南	汝寧	光州	息・真陽	范於□	15	0
						?	?	?
萬曆四十七年正月十四日立	建醮進香	山東	兗州	曹州	定陶	張恩忠、陳□、韓宗禮	18	0
康熙元年十月十八日建醮朝山立記	三山進香	山東	兗州		魚臺	王□蛟	10	0
萬曆四十二年正月初十日立		山東	兗州	濟寧	鉅野	張周	18	0
康熙三年八月初九日立		山東	兗州	濟寧		馬先	52	34
萬曆甲寅歲孟冬之吉同主僧王光□□□□立		山東	兗州		平陰	信官張荷	47	0
萬曆四十七年正月十二日立		河南	開封		中牟	潘世才	7	0
天啓元年十月十六日立						李東曉	10	0
		北直	河間	景州		夏籍	17	0
		山東	濟南	武定	樂陵	劉應冬	4	0
		河南	歸德		商丘	魯元和	10	0
萬曆四十年十月二十五日		山東	兗州		嶧縣	陳道	13	0
		山東	濟南		肥城	鄭門郭氏	1	1
萬曆壬子歲次菊月重陽日留名興石		河南	開封		祥符	召應科	12	0